資料②-1

幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引きの参考資料（初版）

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、
幼保小の先生が一緒に子供の姿から話し合おう

幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引きの参考資料（初版）の位置づけ

○「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き」（初版）においては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとしながら、架け橋期のカリキュラムを策定できるよう工夫することとしている。

○本参考資料（初版）は、幼保小の先生方が、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の共通理解のもとに、子供の姿を中心に据えて話し合うことができるよう作成したものである。

※取組の状況等を踏まえ、手引き（初版）とともに、本参考資料（初版）の更なる改善・充実を図る。

幼保小の架け橋プログラムの実施向けての手引きの参考資料（初版）の目次

1．「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の捉え方の例

活動の中での具体的な幼児の姿について、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに捉える例を示している。

2．事例を通して考えてみる

園と小学校の先生が協議をし互いに理解を深めていくうえでの手掛かりとなるような具体的な事例を示している。

- **記録を基に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について理解を深める**
- **幼児と児童の交流**
- **生活科を中心としたスタートカリキュラム**
- **生活科　アサガオ栽培**
- **国語科(4月)**
- **算数科（4月）**
- **音楽科（5月）**
- **図画工作科（4月）**
- **体育科（5月）**
- **要録を作成し、小学校教育へつなげる**
- **園小連携による障害のある幼児への切れ目ない支援**
- **ICT機器を活用した幼児の豊かな体験**

3．「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と先生の関わり・環境の構成や小学校へのつながり

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が、先生の関わりや環境の構成の改善・充実、幼児期に育まれた力が小学校教育にどのようにつながっていくのかのイメージの共有の手掛かりとして活用できるよう、整理して示している。

4．幼児教育アドバイザーの配置等の主な成果

自治体における幼児教育アドバイザーを活用した取組例とその成果の例を紹介している。

1．「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の捉え方の例

自らの興味や関心に応じて、思うがままに環境と関わる中で、様々な体験を積み重ねていく。その具体的な姿について「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに捉える。

活動の中での具体的な幼児の姿を通して、幼保小の先生方が話し合うことが大切である。ここでは、幼児が自分達で考えたお店屋さんごっこ（クレープ屋さんの場合）を例に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を捉えてみる。

健康な心と体

明日、クレープ屋さんをやりたいと思って、お店に必要な小道具を考えて準備する

自立心

自分達で考えたお店作りが、自分達の力で実現できた達成感、友達が喜ぶ充実感を味わう

協同性

実現したいお店のイメージを友達と共有し、役割分担したり協力したりしながらごっこ遊びを展開する

道徳性・規範意識の芽生え

やりたいことが友達と異なる時には、折り合いをつけながらきまりをつくる

社会生活との関わり

楽しかった地域のお祭りの経験を友達と共有し、かっこよかったクレープ屋さんを再現してみたいと考える

興味や関心に応じて遊びに没頭する
10の姿が絡み合って現れてくる

楽しい

一緒にやりたい

本物らしくしたい

〔今後体験してほしい〕
共通の目的の実現に向けて協力したり、時には互いの思いがぶつかりあう中で、相手の立場になって考えたり、互いが納得できる代案を考えたりしてほしい。

〔過去の体験〕
絵をかいた時に、カラフルに色を塗って楽しんでいたので、また、カラフルにしたいと思ったのかな。

思考力の芽生え

ふさわしい材料を考えてクレープに見立て、より本物らしい見え方を試行錯誤する

自然への関わり・生命尊重

クレープを持って園庭や公園へピクニックに出かけ、花を愛でたり風の気持ちよさを感じたりする

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

生活の中にある文字や数字を使ってみると、お店が本物らしくなり楽しくなることを知る

言葉による伝え合い

興味を持った出店について友達と意見交換し、自分の思いが伝わる表現を工夫したりしながら話し合う

豊かな感性と表現

クレープ生地に具材を置くときに、カラフルできれいにみえるようにするなど、自分なりの表現を楽しむ

1．「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の捉え方の例

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、どのような姿が見られるのか、実際の保育の場面を取り上げて語り合うことが大切である。

「指導と評価に生かす記録（令和3年10月）」3章2.（6）事例2の学級だより

どんな姿が見られるか幼保小の先生たちで一緒に考えてみましょう。

※子供の姿を語り合うプロセスを積み重ねることが大切です。

○

○

○

○

○

・
・
・

※様々な場面での保育や授業における子供の写真や動画を用いて、幼保小の先生方で話し合うことが大切。

2．事例を通して考えてみる　～記録を基に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について理解を深める～

「指導と評価に生かす記録（令和3年10月）」3章2.（4）事例4概要（一部修正）

園と小学校の先生が、保育参観や５歳児担任の記録を基に、幼児の育ちや園教育と小学校教育の学びのつながり、先生の関わりについて合同協議を行った。保育参観では、幼児が関わりながら土山で水路や温泉を作る遊びを取り上げ、幼児の姿から何に興味・関心をもって楽しんでいるのか、どのような力が育とうとしているのかなどの視点を設定した。協議では、具体的に見られた幼児の姿について、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとして、意見交換を行った。

＜土山遊びのねらいと内容＞

・ねらい：土や水の感触を味わうとともに、友達とイメージを共有し、自分なりに試したり考えたりしながら、友達と力を合わせて作る楽しさを味わう。

・内　容：友達とイメージを共有しながら、力を合わせて大きな土山での水路作りをして遊ぶ。

＜保育参観の視点＞

・遊びの姿から、何に興味や関心をもって楽しんでいるのか

・遊びの中で、どのような力が育とうとしているのか（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに）

・育ちを支える園の先生のかかわり（環境の構成）について

＜担任の記録＞

幼児の姿	先生の読み取りと願い
水路のある部分で、Ｓ児、Ｒ児、Ｔ児が土を深く掘り水をため、「温泉にしよう」と言っている。Ｓ児が「どれくらい深くなったかな」と言いながら裸足で入っていく。他の幼児も手を止め入っていき、「キャー！」と叫びながら、笑顔で手を取り合って喜んでいる。Ｒ児が「ここ、めっちゃ深い」と言うと、Ｔ児が「どこどこ？」と近づき深さを確かめる。その後、Ｒ児は水から出て、足のぬれている境目の部分を指差し、「ここ（ひざ）くらいまで！」と驚いていた。 一方、Ｍ児が水の深いところ（温泉）と浅いところ（川）を行ったり来たりしている。Ｍ児が「こっちは冷たい」と言ったので先生も川に入り、「本当だ！」と驚いて伝えた。その声を聞いた周りの幼児たちが関心をもち始め、同じように行き来して確かめ、水温の差に驚いている。先生が「何でだろうね」とつぶやくが、幼児たちはあちこちを歩き回り、「ここがめっちゃあったかい」などと知らせ合っている。	水がたまった場所を掘り進め深い温泉にしたいと考えた。 Ｓ児は見た目ではよく分からない水の深さを確かめたいと思い、Ｒ児とＴ児も続いた。裸足で浸かる水の気持ちよさと、自分たちが掘った深さを感じ、喜び合っている。 水の中では感覚的に深さを感じていたが、足の濡れている境目を見て、改めてどれくらい深いかを実感している。 Ｍ児が場所によって水温が違うことに気付き、繰り返しその違いを味わっていた。先生は、驚きを一緒に感じたいと思い、Ｍ児をまねてみた。そのやり取りに気付いた周りの幼児も水に入り、水温の差を感じ、驚き面白がっていた。 先生は、なぜ水温が違うのか一緒に考えたいと思い「何でだろうね」とつぶやいたが、幼児たちはどこが温かいのか冷たいのか探ることを楽しんでいた。こうした体験を積み重ねていくことで、どうして水温が違うのか、なぜ温度が変わるのか、予想したり試したりして考えることを楽しみたい。

2．事例を通して考えてみる ～記録を基に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について理解を深める～

【保育参観後の協議】　「指導と評価に生かす記録（令和3年10月）」3章2.（4）事例4概要（一部修正）

視点①幼児にどのような力が育とうとしているかについて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに考える

園と小学校の先生からは、主に以下のような意見があった。

・友達と深い温泉を作ろうという共通の目的を見出し、工夫したり協力したりする姿
　→「協同性」の「共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したり」する姿
・互いに気づいたことを伝えあい刺激し合う姿
　→「言葉による伝え合い」の「経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたり」する姿
・自分なりに水溜りの深さを確かめるための方法を考えてやってみる姿
　→「思考力の芽生え」の「物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したり」する姿、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」の「遊びや生活の中で、自らの必要感に基づき、数量や図形」への「興味や関心、感覚をもつようになる」姿

視点②育ちつつある姿が、小学校の教育のどのような場面につながるかを考える

小学校の先生から、以下のような意見があった。

・「水溜りの深さ」を試行錯誤して確かめる体験は、水のかさなどについて調べる中で、実感を伴った理解につながる。
・学んだことを日常生活の中で活用し、主体的に問題を解決する態度にもつながる。

視点③園の先生や小学校の先生の関わりについて、大切にしていることを共有する

小学校の先生からは主に次のような意見があった。

・先生は、場所により水温が違うことを発見し、不思議に思ったり水の深さに着目する幼児の姿を見逃さず、一緒に楽しんで見せていた。意図的に教えなかったと知り、驚いた。
・園では繰り返し取り組みながら学んでいける。その体験が小学校以降、物事に関心をもち、その理解を確かなものにしていくことにつながると感じた。

園の先生からは次のような意見があった。

・幼児はいろいろな場所の温度を確かめたり、温度差を肌で感じることを楽しんでいる段階と思い、調べて回り温度差を味わうことが大事と判断した。遊びを繰り返す中で、理由を予想したり、仮定して試したりしていきたい。
・幼児教育では、すごい、おもしろい、なぜだろうといった気付きをどう深めるか、その過程を大事にしている。

この事例を通して、例えば、次のようなことが分かった。

・保育参観は参観と協議の視点を示して行うこと、幼児の具体的な姿や先生の関わりの意図を示した記録を基に協議を行うことで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた幼児理解ができる。また、「園の先生が自分たちの保育に対する評価を行う場とするだけでなく、小学校の先生の幼児教育への理解を深める場とする」、「園の先生が小学校教育について学び、幼児の学びの見通しをもつ」などといったよさが見えてきた。このように、互恵性のある合同協議の場となるよう、協議の事前準備やその方法を工夫して進めることが大切。

2．事例を通して考えてみる　～幼児と児童の交流～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開（令和3年2月）」3章2．事例5概要

5歳児と小学校1年生の交流（七夕製作）。交流活動では、幼児児童それぞれにねらいを設定するとともに、共通のねらいを設定。交流活動は2学級に分かれて別日程で実施し、事前の話し合い→準備→交流活動→振り返りを行った。最初の交流活動では、児童が一人一人の幼児に寄り添い丁寧に教えながら七夕飾りを製作している様子が見られ、幼児も落ち着いて活動できていた。

最初の交流活動を園と小学校の先生が一緒に振り返ってみると

・楽しく活動をしており、ねらいもおおむね達成できていた
・小学校の先生の指示がとても的確でスムーズな交流活動ができた

しかし、次第に「自分でできることをやってもらっている幼児にとって交流の中での学びは何か」といった意見もでてきたので、幼児・児童それぞれにおける学びについて意見交換を行った。その際、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとして活用した。活動を通して、主として次のような姿が見られたとの意見がでた。

・いろいろな人と親しみをもって関わる姿や、どのように関わったらよいかということを考える姿（社会生活との関わり）
・自己紹介をする、相手に作り方を教える、願い事を伝える、話をしっかり聞くなどの姿（言葉による伝え合い）
・４つの種類の製作を時間内で作るという課題に対して、見通しをもつ力（健康な心と体）

話し合ううちに、園の先生からは次のような意見があった。

・指示により安心して活動できるが、幼児が考える余地があれば、違う立場の人との関わり方を考える姿（社会生活との関わり）、時間の使い方やどの製作をするか等見通しをもって行動する姿（健康な心と体）がみられるのではないか
・園では幼児同士が助け合ったりしているが、交流会では全員がお世話される側の印象。幼児が能動的に行動する姿や児童と一緒に目的に向かって取り組む姿があまり見られなかった(自立心、協同性)
・願い事の短冊は書けないところのみ手伝ってもらう方がいいのではないか（数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚）

小学校の先生からは次のような意見があった。

・製作が得意であったり、リーダーシップをとれたりする幼児がいることがわかった
・同学年の中ではなかなか力を出せないが、今日は自信をもって活動できていた(自立心)
・年下の子に何かしてあげたいという気持ちからがんばろうとする姿も見られた(社会生活との関わり)

2．事例を通して考えてみる　～幼児と児童の交流～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開（令和3年2月）」3章2．事例5概要

さらに、先生の子供への関わり方についても話し合いが及んだ。
小学校の先生からは次のような意見があった。

・園の先生は、認めたり、共感したりと子供たちにその場で直接的な関わりをすることが多いように思った。児童には自分なりに考えさせ、結果を自分で受け止めさせたい

園の先生からは次のような意見があった。

・園では、認めて伸ばす、共感するということを大切にしている
・幼児は遊んでいるそのときに楽しさや満足感を味わえないと次回へと気持ちが続かないので早めに援助しやすいかも

そして、子供たちの発達を踏まえた対応の違い等に戸惑ったとの意見があった。次回の交流活動では互いの指導をよく見合い、互いの教育についてもっと理解し合う必要があること、子供たち同士の交流を大事にするため、子供たちがつくり上げようとする世界をもっと大切することを確認し合った。また、先生は1年生に「～してください」などの指示を控え、4種類全ての製作を目指すのではなく、何をどれだけ作るかも子供たちに考えさせた。

次の交流活動を園と小学校の先生が一緒に振り返る中で、次のような意見があった。

・前回同様、児童や幼児が交流活動を通していろいろな人と親しみをもって関わる姿やどのように関わったらよいかということを考える姿（社会生活との関わり）、相手に作り方を教える、話をしっかり聞くなどの姿（言葉による伝え合い）、見通しをもって活動する姿（健康な心と体）などが見られた
・子供たち自身でグループ内の関係つくりができるようにし、活動も各グループに任せることにした結果、「『皆で』とか『私たち』という言葉が聞かれ、一つのめあてにむかって、児童も幼児も一緒になって取り組む姿が見られた(協同性)。そのことによって、達成感も見られた(自立心)
・輪飾りの数を数えたり、長さを測ったりする活動にも広がったり、幼児にとっては文字を書く機会もできた(数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚)

この事例を通して、例えば、次のようなことが分かった。

・交流活動の振り返りの積み重ねが子供たちに対してより意味のある活動になるかどうかのポイント
・幼児と児童の交流は、双方の子供たちの育ちの上で有意義であるだけでなく、双方の先生にとっても同じ場面の子供の育ちの姿を話題にしていくことで、それぞれの学校種の指導方法や教育観などを理解する良い機会となっている

2．事例を通して考えてみる　～ 生活科を中心としたスタートカリキュラム～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開（令和3年2月）」3章2．事例6概要（一部修正）

A小学校では、幼児期の教育の学びを踏まえ、より深い学びを実現していくための指導計画を作成しようとし、入学当初、学校や子供の実態に応じて指導の工夫や指導計画の作成を行うために、生活科を中心としたスタートカリキュラム「がっこう　だいすき」を構想した。

幼児期から児童期にかけて自分との関わりを通して、総合的に学ぶ子供の発達の特性を踏まえ、次の２つの視点からスタートカリキュラムを構想した。

・生活科「がっこうたんけん」を中心に他教科等のねらいを考えて、合科的・関連的な指導の工夫をする。
・直接体験を通して、生活上必要な習慣や技能等を身に付けられるようにする。

園との円滑な接続のため、合同保育参観を行った後、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ、子供の成長の姿や先生の働き掛けの意図について共有を図った。園の先生からは園の生活について、登園したら主体的に自分のしたい活動に取り組み、道具や材料を自由に使えるように用意していること、先生がいなくても幼児同士で教え合いながら作ったり遊んだりする育ちの姿があることが紹介された。

A小学校では、園との意見交換を踏まえて入学してくる子供の様子を想定し、スタートカリキュラムのねらいを設定した。また、編成の基本姿勢を確認して週案を作成した。

＜スタートカリキュラムのねらい＞

・幼児期の生活に近い活動や環境の工夫、人と関わる活動を位置付け、安心感をもてるようにすること
・安心して自分の力を発揮し、成長への意欲を高めること
・自分で考え、判断し行動することを繰り返し、主体的な学習者として育っていくこと
・全ての教職員が子供たちと関わりをもつために、学校全体の取組として考えること

＜スタートカリキュラム編成の基本姿勢＞

①一人一人の子供の成長の姿から編成する
②子供の発達を踏まえ、時間割や学習活動を工夫する
③安心して自ら学びを広げる学習環境を整える
④生活科を中心に合科的・関連的な指導の充実を図る

2．事例を通して考えてみる　～ 生活科を中心としたスタートカリキュラム～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開（令和3年2月）」3章2．事例6概要（一部修正）

第２週の週案「はじめまして学校～自分でできるようになろう～」

	16 日（月）	17 日（火）	18 日（水）	19 日（木）	20 日（金）
8:30 朝の活動	登校したら荷物の整理・トイレ、席についてお絵かき・読書 なかよしタイム 歌・ゲーム・読み聞かせ　朝のあいさつと健康観察・1日の予定確認				
8:50 1時間目 9:35	【国・生】 はじめて書く自分の名前 どうぞよろしく じこしょうかい	【音・生】 歌を歌ってなかよくなろう	【生】 学校たんけん② もう一度たんけんしたいな	【生】 学校たんけん③ もう一度行って見たい場所はどこかな	【音】 歌でなかよし 校歌
9:40 2時間目 10:25	【体・生】 探検に行く順に並ぼう 学校たんけん①	【体・算】 体操服に着替えよう じゅんばん	【生・算】 校庭たんけん 遊具の使い方 10までの数		【図】 いろいろなかたちを作ってみよう
10:45 3時間目 11:30	学校にはどんなところがあるのかな	【生・図】 みなさん よろしく		【体】 ならびっこ 遊具で遊ぼう	【算】 数と数字
11:35 4時間目 12:20			【算】 数えて遊ぼう	【学】 皆で給食の準備をしよう	【国】 えんぴつを持って書いてみよう
給食			楽しい給食		
清掃			自分の場所をきれいにしよう		
14:05 5時間目 14:50			【音】 手と手であいさつちょうちょう	【算】 なかまをつくろう	参観授業 【国】 えんぴつを持って書いてみよう

幼稚園で親しんだ絵本や手遊び歌

教室の後ろに低いテーブルを置き、自由に活動

モジュールにわける

ブランコは10回数えたら交替だよ

《合科的な指導》

よろしくね　名刺交換

【週案を作成する際に意識して取り入れたこと】

○朝の時間「なかよしタイム」で園で親しんだ手遊び歌、読み聞かせ
○好きな材料で自由に絵を描いたり、製作ができる低いテーブル
○複数の教科等を組み合わせて展開する合科的・関連的な指導
○新しい友達と交流ができる学習活動（グループ活動、名刺交換）
○ゆったりとした時間の中で学習活動が進められる２時間続きの学習活動
○１０～１５分程度の短い時間を弾力的に活用した時間割（モジュール）

具体の実践と記録を見てみましょう

2．事例を通して考えてみる　～ 生活科を中心としたスタートカリキュラム～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開（令和3年2月）」3章2．事例6概要（一部修正）

「もっと、見たい、知りたい、調べたい」～幼児期に育まれた好奇心、探究心を生かして～

園では、自然散策をしながら見付けた木の実を観察したり、 図鑑で調べたりする活動を体験しており、関心のあることについてより詳しく知りたいと考え遊ぶ幼児の姿が見られていた。また、きれいな虹や雲の変化を発見すると、友達や先生に伝えたり、絵をかいたりして、好奇心や探究心をもって考えたことをその幼児なりの言葉や絵で表現する姿が見られていた。小学校では、幼児期に育まれた好奇心や探究心を生かし、入学当初の児童が感じている不思議や驚きを大切にして「がっこうたんけん」をスタートした。

【スタートカリキュラム「がっこうたんけん」の実践における記録と考察】

●第３週（４月２７日）　ー学校のいろんなところを探検したよー

学校探検により、「図書室で本の修理をしていた」「給食のいいにおいがした」と気付いたことを発表した。先生は児童の発言を黒板に書きながら、もっと知りたい、調べてみたいという好奇心、探究心を引き出していった。児童の思いを付箋に書いて学校探検の地図に貼り付け、児童の思いや願いの解決に向けた２回目の探検を行うことにした。

●第５週（５月８日）　ーもっと探検して分かったことを発表しようー

前回の探検で本の修理をしていた図書室の先生に「図書室でどんな仕事をしているのですか？」とインタビューした児童の発言から、分からないことは人に尋ねて教えてもらうといいことに気付いた。校長室を調べに行った児童は、校長室のメダルは何のメダルなのかという疑問をもち、校長先生にインタビューすることになった。校長先生は「このメダルは小学校のお兄さん、お姉さんたちがもらったんだよ」と上級生の活躍の話をしてくれ、上級生の存在にも気付き、親しみとともに憧れをもったようだ。 不思議に感じたことを解決した児童たち。人とつながっていくことで、「わたしも頑張りたい」と学校生活への夢や希望をもち、意欲をもって生活するようになる姿が期待できる。

2．事例を通して考えてみる　～ 生活科を中心としたスタートカリキュラム～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開（令和3年2月）」3章2．事例6概要（一部修正）

●第１０週以降（６月１２日）　ー自分たちの安全を守ってくれる人たちー
ある児童は交通指導員のＳさんについて、「いつも挨拶してくれる」「横断歩道で渡ってもいいよと教えてくれるよ」と、Ｓさんから声を掛けられて嬉しかった体験を発表した。その挨拶や言葉に込められている思いに触れ、通学路で安全を守ってくれていることに気付き、お礼をしようと考えた。先生がどうしたらお礼ができるか問い掛けると、児童から「ありがとうと言いに行こう」「お手紙を書いたらいい」と具体的な活動を伝え合った。そして、Ｓさんを学校に招き、お礼の手紙と折り紙で作ったプレゼントを渡した。Ｓさんは交通指導員の仕事や役割について話し、「皆が元気に挨拶し、安全に学校に通ってくれることが嬉しい」と語ってくれた。児童にとって交通指導員は直接関わりがあり、親しみをもつ存在。交通指導員の仕事や役割、自分との関わりに気付くだけでなく、安全な学校生活のためにいてくれることの意味を見いだした。自分が体験したことや調べたことを他者と伝え合い交流する中で、一人一人の気付きを共有し、学級全体で高めていくことができた。

この事例を通して、次のようなことが分かった。

○児童は小学校に入学し、具体的な活動や体験を通して気付いたことを基に考えることで、新たな思いや願い、疑問などが生まれる。それを一つ一つ取り組んだり解決したりすることで、施設の様子や学校生活を支えている人々や友達などに気付く。そして、自分たちは様々な人や場所と関わり、支えられていることを実感することで安心感をもつ。

○園でも行っている、気付いたことを伝え自分なりに表現し友達と振り返る場の設定により、曖昧だった気付きが確かなものになっていった。園での経験を踏まえ、体験と表現を繰り返すことで、気付きの質を高め、学びを深めていると言える。

○今後も園での幼児の姿、学校での児童の姿から、それぞれの学びを園と学校の先生が共有し、スタートカリキュラムを編成・実践しながら、１年生の様子を授業参観等で把握したり、先生同士が意見交換したりすることで、スタートカリキュラムの評価・改善につなげていくことが期待される。

2．事例を通して考えてみる　～ 生活科　アサガオ栽培～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開（令和3年2月）」3章2．事例7概要（一部修正）

児童たちがこれまでの経験を想起しながら安心して意欲的に活動できるようにし、１年生の学習をゼロからのスタートとせず、アサガオやそれを使った遊びについて、同じことの繰り返しではなく学びの質を高めていくように工夫した。

児童は、園や家庭において色とりどりのアサガオの花を見たり育てたりする経験を通して、アサガオは種から育つこと、育つとつるが出て巻き付きながら伸びることなどに気付いたり、友達や先生に伝えたりしている。また、植物が育つためには世話が必要なことも漠然と理解し、友達と一緒に水やりなどをした経験をもつ児童もいる。アサガオの成長に関心をもち、生命の尊さに気付き、いたわったり大切にしたりしてきている。

【生活科　アサガオ栽培における指導のポイント】

例えば、

・単元を構想するに当たり、通っていた園等や家庭から、植物の栽培やそれを生かした遊び、製作などに関する情報を収集し、**幼児期の経験や学びを栽培活動につなげられるよう工夫した。**（★例１）

・自分のアサガオを一人一鉢で栽培することを基本とした。**学習の環境は「環境を通して行う教育」を基本とする幼児教育を参考とし**（★例２）、例えば、アサガオの鉢は、日常的に関われるよう玄関や教室の前に置いたり、遊びや製作の際には、材料や道具の種類や量、配置に配慮した。また、入学間もない時期であることから、**特に一人一人の取組の違いに十分配慮した**（★例３）。

・児童の実態を把握した上で単元を構想し、児童の興味や関心が高まるような導入にしたいと考え、学習計画を児童たちと一緒に立てることで、**単元全体の見通しをもって学習を進められるようにした**（★例４）。

・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を参考にしながら、児童が**学習対象と主体的に関わりながら活動できるよう工夫した**（★例５）。

・**伝え合い交流する場を意図的・計画的に設定することで、児童の気付きの質を高めることにもつなげていこうと考えた。**（★例６）

・表現しやすいように観察カードを工夫したり、生活科の時間以外にも児童同士で情報交換できる機会をつくったりした。観察の際には、見るだけでなく、嗅いだり触ったりするなど、**諸感覚を働かせることを促し**、比べたり、見付けたりなど、**多様な学習活動となるようにした**（★例７）。

・観察で気付いた事実にとどまらず、**自分の気持ちと結び付けて表現できることも大切**（★例８）。

・振り返り表現する活動を通して、アサガオの世話をして成長を見守った自分自身の成長や自信につなげたいと考えた。

2．事例を通して考えてみる　～ 生活科　アサガオ栽培～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開（令和3年2月）」3章2. 事例7概要（一部修正）

【単元の目標】
アサガオを育てる活動を通して、その変化や成長の様子に関心をもって働き掛けることができ、 アサガオが成長していることに気付くともに、親しみをもち大切にしようとする。

①「アサガオの種をまこう」（本時１／１８）

◆本時の目標：アサガオについてこれまでの経験や知っていることを伝え合うことを通して、種を観察したり自分がまく種を選んだりして、アサガオを育てることへの意欲や、経験を基にきれいな花を咲かせることへの期待をもつことができるようにする。

主な活動	指導上の留意点
○アサガオの写真を見て、これまでの経験を想起する。 ・「園にたくさん咲いていた」 ・「先生と一緒に水やりしたよ」 ・「色水つくって遊んだよ」 ・「最後にいっぱい種ができた」	○興味や関心には個人差があるので、多くの児童が意欲的に取り組めるよう、これまでの経験を問い掛けるだけでなく、学習環境も工夫する。 ・アサガオの写真をしっかりと見ることができるように、児童を教室の前に集め、目の高さで提示する。 ・つぶやきも拾い、できるだけ多くの意見を取り上げる。 ・個々の経験は違っても、それぞれがアサガオについて想起できている姿を認める。
○アサガオを育てる中で、やってみたいことを伝え合う。 ・「きれいな花をたくさん咲かせたい」 ・「水を毎日やるのが大切だよ」 ・「花が咲いたら、色水遊びをしたいな」	○園などでは、植物を栽培する際にどうしていたか問い掛け、経験を取り上げていくことで「これまでの経験が小学校でも使える」という自信をもてるようにする。（★例１） ○児童の意見から、「めあて」や「学習計画」を設定し、見通しをもてるようにすることで、主体的な学びの実現につなげる。（★例５）
○本時を振り返り、気付いたことや楽しみなことを伝え合う。 ・「大きくなるようにたくさん水をやるぞ」 ・「何色の花が咲くのか楽しみ」	○栽培への意欲に結び付けるようにする。

2．事例を通して考えてみる　～ 生活科　アサガオ栽培～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開（令和3年2月）」3章2. 事例7概要（一部修正）

②「アサガオの芽を観察しよう」（本時５／１８）

◆本時の目標：芽を出したアサガオの様子を観察してカード等に記録し、それを基に交流することを通して、各自の発見したことや楽しみなことを友達に伝えることができるようにする。

主な活動	指導上の留意点
○アサガオの芽が出た様子を観察する。 ・「同じ葉っぱが２つある」 ・「○○さんのは、大きい葉っぱがあるね。形も違うみたい」	○自分のアサガオだけでなく、友達のアサガオも見て比べるよう促す。（★例７）
○観察カード等を基に、自分のアサガオについて紹介する。 ・「種が葉の上にのっていて重そう。早くとれるといいな」 ・「○○くんは、葉っぱがたくさんあってすごいな」	○自分のアサガオをしっかりと発表できていることを認める。 ○友達の発表を聞くときには、自分と比べて聞くようにすることで、気付きの質を高めるようにする。（★例６）
○本時を振り返って次時につなげる。 ・「○○さんみたいに大きくなるように、毎日水をやろう」	○アサガオの成長を楽しみにし、世話をしていこうという気持ちをもてるようにする。

③「アサガオの世話の仕方を考えよう」（本時６／１８）

◆本時の目標：アサガオの支柱を立てることを通して、大きくなったアサガオの世話の仕方を考え、それに合った世話ができるようになるとともに、大切にアサガオの世話をすることができるようにする。

主な活動	指導上の留意点
○大きくなったアサガオについて、感じていることを伝える。 ・「くねくね伸びて、○○さんのとくっついちゃった」	○成長の早いアサガオのつるが伸び始めた頃がよい。伸びたつるが絡まり困っていることを引き出せるようにする。
○本時を振り返って、次時につなげる。 ・「明日はつるがどうなっているかな」 ・「これで安心、どんどん大きくなってね」	○アサガオの成長をますます楽しみに感じながら、世話を続けていけるようにする。（★例８）

2．事例を通して考えてみる　～ 生活科　アサガオ栽培～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開（令和3年2月）」3章2. 事例7概要（一部修正）

新たな気付きとなり、気付きの質が高まっていく（気付きの変容）

◎無自覚だった気付き
◎個々の気付き

→

◎自覚化された気付き
◎他の気付きと関連付けられた気付き

④「アサガオのひみつを見付けよう」（本時８／１８）

◆本時の目標：花が咲いたアサガオを観察することを通して、成長の様子を見付けたり比べたりたとえたりして、植物の成長のおもしろさや不思議さに気付くとともに、これからの成長を楽しみにして育てることができるようにする。

主な活動	指導上の留意点
○花が咲いたアサガオを見て、気付いたことを出し合う。 ・「きれいな花がいっぱい咲いている」 ・「水やりを頑張ったから、葉っぱも元気だよ」	○自由に気付いたことを言い合える雰囲気をつくり、花だけでなく他のところについての意見も積極的に取り上げていく。 ○これまでに各自が世話をしてきた頑張りを認めるようにする。
○自分のアサガオを観察し、見付けたことをカードに記録する。 ・「本当だ！虫眼鏡を花から離したら大きくなった」 ・「つぼみって、何だかねじれているみたい」 ・「○○くんの花は、私と同じピンクだけど色が濃いね」 ・「今日初めて花が咲いたんだ」、「嬉しいな」	○細部まで観察するよう虫眼鏡を準備しておく（★例４）。使用の際には扱い方にも留意する。 ○見付けることの観点として、次のことが考えられる。 ・花（含つぼみ）、葉、つる ・色、数、大きさ、形 ・見る、嗅ぐ、触る ○これまでの自分のカードと比べてみることも観点の一つとして提示してもよい。
○見付けたことについて、 発表し合う。 ・「葉っぱは、全部で○枚、大きいのは手より大きい」 ・「私のつるも友達のつるも同じ向きに巻き付いていた」 ・「葉っぱに毛がはえていて、ざらざらする。ひげみたい」	○具体的な数や比較を用いて伝わりやすい表現を取り上げる。 ○全体として確認したいことは、一人一人が観察できる時間をもつようにする。 ○児童の気付きを黒板に書きながらまとめ、共有を図る。
○これからもアサガオの成長を楽しみにし育てようとしている。 ・「全部でいくつ咲くのかな」、「数えてみよう」	○各家庭でもアサガオの成長を楽しみにしていけるように観察カードを工夫する。

2．事例を通して考えてみる　～ 生活科　アサガオ栽培～

「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開（令和3年2月）」3章2. 事例7概要（一部修正）

⑤「アサガオの花や葉っぱで遊ぼう」（本時１１／１８）

◆本時の目標：アサガオの花や葉っぱを使ってできることを出し合い、それらの遊びを楽しむことを通して、アサガオへの愛着をもち、これからも大切にしようとする気持ちをもつことができるようにする。

主な活動	指導上の留意点
○たくさんの花や葉を使い、どんな遊びができるか話し合う。 ・押し花、たたき染め、色水づくり	○これまでの経験を基に、できる遊びや、それに必要な材料や用具を考えられるようにする。 （★例３）
○それぞれが自分のアサガオでしたい遊びをする。 ＜押し花コーナー＞ ・「園のときは花で作ったから、今度は葉っぱも一緒に入れたいな」、「どれくらいで押し花になるかな」	○それぞれの遊びができるような環境を設定する。 ・押し花コーナー ・たたき染めコーナー ・色水コーナー ○材料や用具の種類や量、配置に配慮する。（★例２）

⑥「すてきな記念品を作ろう」（本時１４／１８）

◆本時の目標：記念品を作るのに必要な準備を話し合うことを通して、種を取った後のアサガオのツルを生かたリース作りを思い浮かべながら、アサガオを育てた気持ちも大切にしようとすることができるようにする。

主な活動	指導上の留意点
○種を取った後のアサガオをどうするか話し合う。 ・「園のとき、サツマイモのリースを作ったよ」 ・「アサガオでもできるかもしれない」、「つくりたいな」	○茎（つる）を使って作った経験を想起できるようにする。 ○児童のアサガオを大切にしたいという気持ちは受け止め、実現できることという観点で作る記念品を決めていく。
○必要なものを話し合う。 ・「つるを丸くしているよ」 、「飾りが違うと全然違うね」 ・ひも 、針金 、松ぼっくり、ビーズ 、木工用接着剤 等	○見本を提示する。作り方は児童が考えられるようにする。児童の意見から作り方を整理し、材料の準備につなげ、リース作りの見通しを持てるようにする。

この事例を通して、次のようなことが分かった。

○生活科では、対象に直接働き掛けたり、気付いたことを表現したりする具体的な活動や体験を繰り返し、対象との関わりを深めながら気付きの質を高めていくことを目指している。「気付きの質が高まる」とは、無自覚だった気付きが自覚化されること、個々の気付きの共有からそれぞれが関連付けられ新たな気付きになること、対象のみならず自分自身への気付きになることなど、気付きが変容していくことである。

○小学校においても、先生は児童の気付きに共感したり、疑問に児童が答えを探せるよう環境を整えたりすることが大切。

○児童たちが「園でもやったことがある」と安心したり関心をもったりして学習に取り組むことや、対象に繰り返し関わり気付きの質を高めたりするためには、幼児期に豊かな体験を積み重ねることが大切。例えば、自然との触れ合いで、幼児期には、まず幼児がゆったりと自然に向き合える時間を確保し、十分な経験を保障することが必要不可欠。また、先生自らが自然の変化に気付き、幼児と共に感動したり、命を大切にしたりする姿勢をもつことが重要。

2．事例を通して考えてみる　～国語科（4月）～

文部科学省国立教育政策研究所編著　「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム　スタートカリキュラム導入・実践の手引き」

1　単元名「よろしくね」

2　本単元につながる幼児期の子供の姿

幼児は、安心して話すことができる雰囲気の中で、教職員や友達など身近な人々の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり話したりしながら、言葉で表現する楽しさや伝え合う喜びを味わう経験を積み重ねている。

また、幼児は遊びや生活の中で、人に何かを伝える、あるいは人と人とがつながり合うために文字が存在していることを感じ取り、文字が様々なことを表現するためのコミュニケーションの道具であることに気付いていく。例えば、レストランごっこでメニューを作る際、本物らしくしようとする気持ちが高まってくると、絵だけでなく文字を使おうとする。分からない文字があると教職員や友達に聞いたり、「『めろんじゅうす』の『め』は、めいちゃんの『め』だね」と気付いて友達の名札を見て書いたり、「私、『め』は書けるよ」と友達が助けたりしながら、メニューを作り上げていく。そして、「いらっしゃいませ。何にしますか」「『めろんじゅうす』ください」などのやり取りが行われ、文字があることで相手に伝わる楽しさや遊びが面白くなることを感じ、文字への関心は更に高まっていく。

3　単元について

（1）単元の目標

名刺カードを作ったり交換したりする自己紹介の活動を通して、相手によく分かるように、自分の名前などを丁寧に書いたり、友達に知ってもらいたいことを考えたりする。

（2）単元の指導計画（全6モジュール）1モジュール＝15分

	○主な学習内容　　・学習活動
2モジュール	○姿勢や鉛筆の持ち方に気を付けて、自分の名前などを丁寧に書く。 ・書くときの姿勢や鉛筆の持ち方を知り、学年・組・自分の名前を練習する。
2モジュール	○自分の名前などを丁寧に書いたり、友達に知ってもらいたいことを考えたりする。 ・名刺カードに、自分の名前などを書き、友達に知ってもらいたいことを絵で表す。
2モジュール	○自分の名前や友達に知ってもらいたいことを友達に伝えて、自己紹介をする。 ・名刺カードをクラスの友達と交換する。

2．事例を通して考えてみる　～国語科（4月）～

文部科学省国立教育政策研究所編著　「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム　スタートカリキュラム導入・実践の手引き」

4　本単元におけるスタートカリキュラムの指導について

幼児期には、自分の話や思いが相手に伝わり、相手の話や思いが分かる楽しさを感じる体験や、一人一人の幼児がその幼児なりの必要感をもって、標識や文字などに関心をもち、その役割に気付いたり使ったりしながら、感覚が磨かれるような体験をしている。

このような経験を生かし「自分のことを知ってもらいたい」「友達をいっぱい作りたい」という児童の思いや願いを実現する必要感をもったやり取りができるような言語活動を構成することが大切となる。

本単元は児童の発達特性を踏まえて、集中力や意欲を持続させるために、15分間の短時間学習6回で構成している。名刺カードの交換で児童は多くの友達と関わり、それを通して新しい友達関係を築き、安心感をもったり仲間意識が高まったりする。また、この時期の児童は、文字を書く経験の個人差が大きく、不安を抱いている児童も少なくない。教科書や児童のワークシートの拡大版を黒板に貼ったり、イラストを使って視覚的に指示をしたりするなど、どの児童にも分かりやすい環境を構成することが重要である。

5　授業の実際（本時5～6／6モジュール）

（1）本時の目標

自己紹介に向け、作成した名刺の交換の仕方を考えたり、友達に話したいことや聞いてみたいことなどについて進んで話したり聞いたりしようとしている。

2．事例を通して考えてみる　～国語科（4月）～

文部科学省国立教育政策研究所編著　「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム　スタートカリキュラム導入・実践の手引き」

（2）本時の展開【吹き出しはスタートカリキュラムの指導のポイント】

主な学習活動	指導上の留意点
○前時を振り返って、本時のめあてや見通しを立てる。 ともだちを　いっぱい　つくるために なまえかあどを　こうかんしよう	・名刺カードに自分の名前などを書いたことを想起できるようにし活動の目的を明確にする。
○名刺カードの交換方法を話し合って決める。 ・挨拶（はじめまして。よろしくね。友達になってね。） ・自分の名前 ・絵に描いたこと（好きなものや好きな色など） ・握手　　など	・名刺カードの交換方法を児童と考えることを通して、活動への意欲を高める。 ・児童と教師が教室の前で名刺カードの交換を実際にやってみるなどして、活動の仕方を理解できるようにする。 アイデアをみんなで出し合い、モデルを自分たちでつくる経験をすることで、「学校も自分たちで考えて決めていくんだ！」という安心感や意欲、学習への構えが生まれる。
○自己紹介をしながら、名刺カードを交換する。 ・はじめまして。友達になってね。 ・犬が好きなんだね。私も好きだよ。家で飼っているの？ ・うん、かわいい犬がいるよ。今度見に来てね。 名刺カードは、新しくできた友達の人数を可視化することができる。家庭に持ち帰って話もでき、保護者の安心感につながる。	・自分から声を掛けることができない児童には、声の掛け方を教えて一緒にやってみたり、他の児童とつないだりする。 ・男女間や違う園出身の友達と自分から交換している児童や、友達の名刺カードの絵を見て質問をするなどしている児童を「ともだちいっぱい」の視点で褒め、学級全体に紹介する。 絵が話すきっかけになる。質問する力や対話する力は全ての学習において重要となるので、繰り返し取り上げて指導する。
○本時を振り返って、名刺カードを交換した感想を発表し合う。 ・８人も友達ができて嬉しいな。 ・もっと友達をつくりたいな。 ・名刺を作ってまた交換しよう。	・新しい友達ができた喜びを共感的に受け止める。 ・継続的な活動に応えられるよう日常的に白紙の名刺カードを教室に準備しておく。

2．事例を通して考えてみる　～4月　スタートカリキュラム　算数科～

文部科学省国立教育政策研究所編著　「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム　スタートカリキュラム導入・実践の手引き」

1　単元名　「なかまづくりとかず」

2　本単元につながる幼児期の子供の姿

幼児は、遊びや生活の中で、必要感をもって人数や事物を数えたり、量を比べたりすることを体験している。

例えば、ドッジボールで負けたことが悔しくて両チームの人数を数え、「少ないから負けた」と言って同じ人数に分けることで遊びが続き、楽しくなっていく。また、芋掘りをして袋の大きさを見ながら持ち上げて重さの違いに驚き、袋から芋を出して見比べる幼児がいたり、芋の大きさや形の違いに気付き、友達と一緒に分けることを楽しむ幼児がいたりする。それぞれの過程では、自分の気付いたことや考えたことを教師や友達と伝え合い、そのことを共有しながら、遊びが発展していく。

また、積み木などの遊具だけでなく、様々な形の空き箱や身近な自然を取り入れて遊びに必要なものを作ったり、身近な動植物に親しむ中で、花びらや葉、昆虫や魚の形などに気付いたりするなど様々な場面で図形に親しんでいる。

3　単元について

（1）単元目標

10までの数について、個数の数え方や数の読み方、書き方、数の構成などを理解し、数を用いることができるようにする。

（2）単元の指導計画（全11時間）1モジュール＝15分

	○主な学習内容　　・学習活動
３モジュール	○いろいろな観点や条件に応じて、集合を作ったり、一つの集合に対してその集合の観点や条件を考えたりすることができる。 ・絵を見て自由に話し合いながら、同じ条件の集合に着目する。
３モジュール	○集合の要素の個数の多少を１対１対応の方法で比べることができ、数が同じ、違うなどの意味を理解する。 ・数の多少を線で結んだり、ブロックを用いたりして比較する。
３～１１	○数の大きさを表す数詞と数字が対応していることを知り、ものの数を数えることができる。 ・絵を見て、いろいろな集合を見付け、要素の個数に着目する。 ・数詞を対応させる。　・各要素の数や数図に数字を対応させる。 ・具体物を数える練習をする。　・数字の書き方を知り、書く練習をする。 ・数の大小比較をする。　・０という数について知る。・大きい数から小さい数の順に唱えたり、途中からの数から唱えたり、２ずつ交互に唱えたりする。

4　本単元におけるスタートカリキュラムの指導について

幼児期には、一人一人の幼児がその幼児なりの必要感をもって、数量等に関心をもち感覚が磨かれるような体験や、安心して考えを伝え合う中で、自分とは異なる考えに気付き、新しい考えを生み出す喜びを味わうような体験もしている。児童が算数のよさを認識し、学ぶ楽しさや意義を実感できるようにするには、こうした幼児期の体験などを生かし、実生活との関わりを意識した数学的活動の充実を図ることが大切である。

まずは、何でも話してよいという安心感のもてる学級の風土づくりから始めたい。教科書にある動物の絵を見て、発見したこと、気付いたことを出し合う。自分が感じたことをどんどん話してもよいのだと児童自身が実感できることが大切である。児童が自分の言葉で伝え合う中で、数についての関心や学び方を少しずつ身に付けていくことができるからである。

そして、教科書で学んだことを教室や学校の中での具体物や実生活での具体的場面に結び付ける活動を取り入れることで、くらしの中で数が存在していることを自覚化できるようにしていきたい。

なお、次の事例は、入学当初の児童の発達の特性に配慮し、単元の前半は15分間の短い時間を活用して授業を行っている。

5　授業の実際　（本時1モジュール／11時間）

（1）本時の目標

いろいろな観点や条件に応じて、集合を作ったり、一つの集合に対してその集合の観点や条件を考えたりすることができる。

2．事例を通して考えてみる　～算数科（4月）～
文部科学省国立教育政策研究所編著　「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム　スタートカリキュラム導入・実践の手引き」

（2）本時の展開【吹き出しはスタートカリキュラムの指導のポイント】

主な学習活動	指導上の留意点
○教科書の絵を見て、気が付いたことや思ったことを出し合う。 ・カバがいます。・ネコがいます。 ・本当だね。ランドセルもあります。 ・ライオンは、先生だと思います。 「座っているのは、どの動物ですか」 ・ネコです。・パンダもです。 「ランドセルを背負っている動物は何ですか」 ・ブタです。・イヌも背負っています。 ・背負っていないイヌもいるよ。 「どうして間違えちゃったんだと思う」 ・座っていたから気付かなかったんじゃない。 ・なるほどね。 ・ブタは帽子もかぶっているよ。 ・イヌは、帽子をかぶっていないね。先生におはようございますって挨拶しているから帽子を取ったんじゃない。 「どうしてそう思ったの」 ・僕もね野球のコーチに挨拶するとき帽子を取るからなんだ。 ・なるほどね。 「いろいろな仲間が作れたね。次はみんなでやってみよう」	○教科書の絵を見て、自由に話し合いながら同じ観点や条件の集合に着目できるようにする。 数のことに直接関係がない発言も大いに認め、まずは、みんなの前で自分が考えたことを安心して発言できる雰囲気をつくることが大切である。 ○どうしてそう思ったか、前に出て説明できるように、教科書を拡大して示すようにする。 どうして間違ってしまったかを考えることは、必要感をもった話し合いにつながるので、大切にしたい。間違った児童に対して「○○さんのおかげで、いい勉強ができたね」などと声を掛けたい。 ○友達の発言について、隣同士で確かめる機会をつくるなどして集合として捉えられているか確認する。 ○「半そでの服を着ている人」「ハイソックスの 靴下を履いている人」など、集合の観点や条件を変えて集合作りを楽しめるようにする。

2．事例を通して考えてみる　～音楽科（5月）～

文部科学省国立教育政策研究所編著　「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム　スタートカリキュラム導入・実践の手引き」

1　題材名「はくをかんじとろう」

2　本題材につながる幼児期の子供の姿

幼児は、感じたり考えたりしたことをそのまま率直に表現することが多い。また、身振りや動作、顔の表情や声など、自分の身体の動きや音や形などに託して、自分なりの方法で表現している。

遊びや生活の中では身近にあるいろいろな物を楽器のようにして遊ぶ、身近な楽器の音色を楽しんだり、リズムを感じたりする、即興的に歌う、誰かが歌い出すと合わせて歌いはじめる、友達と一緒に踊ったり合奏したりするなどのことを楽しんできている。

幼児は、自分なりの表現や楽しさを教職員や友達と受け止め合いながら音や音楽で十分に遊び、友達と一緒に表現する楽しさを味わっている。

3　題材について

（1）題材の目標

音楽に合わせて歌ったり体を動かしたりしながら、拍の流れにのって表現する喜びを味わう。

（2）題材の指導計画（全4時間）

	○主な学習内容　・学習活動
1	○「なまえあそび」など言葉を使った遊びを通して、拍の流れにのって言葉のリズムをつくる。 ・拍打ちに合わせて「○○○・」（タンタンタンウン）に入る言葉を見付ける。 ・「なまえあそび」のリレーをして楽しむ。
2	○わらべうたを使った遊びを通して、拍の流れにのって表現を工夫する。 ・知っているわらべうたを紹介し合い友達と遊ぶ。 ・「おちゃらか」「なべなべそこぬけ」等、速度に変化をつけて、歌いながら手遊びをする。
3 4	○歌ったり体を動かしたりして、拍の流れにのって表現を工夫する。 ・「さんぽ」を聴いて歌ったり手拍子をしたりする。 ・「さんぽ」に合わせて足踏みや進行をする。 ・教師の伴奏による様々な速度や強弱の「さんぽ」を聴いて歩いたり体を動かしたりする。

2．事例を通して考えてみる　～音楽科（5月）～

文部科学省国立教育政策研究所編著　「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム　スタートカリキュラム導入・実践の手引き」

4 本題材におけるスタートカリキュラムの指導について

幼児期には、幼児自らが興味のある音や音楽で十分に遊び、感じたことや考えたことを自分なりに工夫して表現する楽しさを味わうとともに、友達同士で表現する過程を楽しむ体験をしている。

本題材では、わらべうたや手遊びうたなど、園で遊んだことのある曲を、可能な限り教師が取り上げ、児童が周囲と共有・共感しながら、みんなと楽しく歌ったり踊ったりすることを心掛けたい。そのことで、自分の知っている曲を聞いて活動できる充実感や、友達と一緒に遊ぶ満足感を得て、これからも音楽科の時間を楽しく安心して取り組むことができる雰囲気が醸成される。また、一緒に歌ったり踊ったりする環境構成としては、児童が自由に体を動かすことができる場を整えたい。音楽室のほかにも、オープンスペース、多目的ホール等を活用したり、教室でも机や椅子を後方や廊下等に移動して児童がすぐに手遊びできる場をつくったりすることを心掛けたい。なお、本題材で取り上げるわらべうたや手遊びうた、「なまえあそび」のリレーや楽曲「さんぽ」（作詞：中川李枝子、作曲・編曲：久石譲）を使った足踏みや行進などの学習活動は、音楽科の時間に限らず、朝の時間、昼休み、帰りの時間などで、時間を見付けて継続的に取り上げることで、仲間づくり、居場所づくりにも効果的に働く。

5　授業の実際（本時1／4）

（1）本時の目標

「なまえあそび」など言葉を使った遊びを通して、拍の流れを感じ取るとともに、拍にのって言葉のリズムをつくり出す喜びを味わうことができるようにする。

（2）本時の展開【吹き出しはスタートカリキュラムの指導のポイント】

この時期の児童にとって、学級への所属感をもつことは、大変重要である。少ない時間でも日頃から児童の知っている曲を取り上げ、歌ったり踊ったりしておくことで、自分の存在が認められ安心して音楽の授業に臨むことができると思われる。

2．事例を通して考えてみる　～音楽科（5月）～

文部科学省国立教育政策研究所編著　「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム　スタートカリキュラム導入・実践の手引き」

主な学習活動	指導上の留意点
○「なまえあそび」をして拍の流れを感じ取る。 ・教師の打つ拍に合わせて、 「教師：『○○さん・』 児童：『はあい・』」 の遊びをする。 ・「お名前は」「○○です」の遊びを教師と児童、または友達同士でする。	○教師は一定の速度で拍打ちをするようにするとともに、児童の様子を見ながら、その速度を調整して、児童が安心して答えることができるようにする。 ○「タンタンタンウン」の4拍子のリズムに合わせて、児童の名前を呼び、教師が例示しながら、「はあい・」とリズムをとることができるようにする。 拍に乗れるように教師がテンポを調整するとともに，励ましたり誉めたりしてなごやかな雰囲気の中で進められるようにする。
○拍打ちに合わせて，「なまえあそび」を工夫る。 ・「○○○・」に入る好きな3文字をみんなで見つける。 ・1人→1人、1人→全員などで拍打ちにあわせて「なまえあそび」をする。	○児童から出た言葉を板書したりヒントになる絵や言葉のカードを掲示したりしながら、どの子も拍打ちに合わせ唱えられるようにする。 ○「タンタンタンウン」と4拍目（ウン）に休符を入れながら、みんなの手拍子がそろうように助言する。
○「なまえあそび」のリレーをして楽しむ。 ・拍の流れにのって、 「○○○・」の中に入る言葉のリズムを当てはめながらリレーをする。	○リレーをする際は、3文字の言葉を自分の隣の子へ丁寧に渡すような気持ちで、唱えるように助言する。 拍にのることや，3文字に収めることができなくとも，一生懸命取り組んだり丁寧に取り組んだりしていることを取り上げて，褒めたい。

第2時では、わらべうた、手遊びうたなどは、園で覚えた曲を可能な限り取り上げ、一人一人を認めながら進めたい。

第3、4時では、ペアや4、5人のグループで活動を行い、児童が友達と一緒に楽しく活動できるように配慮したい。

2．事例を通して考えてみる　～図画工作科（4月）～

1　題材名「すきなもの いろいろ」

2　本題材につながる幼児期の子どもの姿

幼児は、園生活の様々な場面で、不思議さや美しさなどを感じ、心を動かしている。そのような心の動きを自分なりに表し、教師や友達に受け止められ、さらに表現することを楽しむようになる。また、体験したことなどをかいたり、様々なものをつくったり、それを遊びに使ったり、飾ったりして楽しんでいる。

例えば、丸をかいて「ぶどう」と教師に見せ、教師がそれをおいしそうに食べるふりをすると、様々な色で丸をかき、食べ物に見立てて楽しむ。遊びに必要なものができると、素材や用具の置いてある場所に行き、色や形、質感などを選んでつくり、そこに模様などをかいて大切に使う。親しみをもって世話をしている生き物を友達と一緒にかいているうちにお話が生まれ、思い付いたことを伝え合いながら自由にかき足していく。

このように、幼児は表現したい思いや遊びの中での必要性から、自分のつくりたいもの、かきたいもののイメージがはっきりしてきて、そのイメージに合った素材や表現の仕方を考えるなど、工夫して楽しむようになっていく。

3　題材について

（1）題材の目標 自分の好きなものや好きなことから表したいことを見付け、表し方を工夫して絵に表す。

（2）題材の指導計画（全2時間）

	○主な学習内容　・学習活動
1，2	○自分の好きなものや好きなことを思い浮かべ、表したいことを見付ける。 ○好きなものや好きなことの形や色を考えながら、画用紙やクレヨンやパスの色を選ぶ。 ○手や体の全体の感覚などを働かせ、好きなものや好きなことをクレヨンやパスを使って工夫して表す。
	○自分や友達の作品を見て、面白さや楽しさを感じ取り、自分の見方や感じ方を広げる。

4　本題材におけるスタートカリキュラムの指導について

幼児期には、心を動かす出来事などに触れてイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ中で身近にある素材の特徴や表現の仕方などに気付き、自分なりに工夫して表現する楽しさを味わっている。また、友達と思いなどを伝え合い、イメージや考えを広げながら遊びを進めていく体験もしている。本単元では、子供の好きなことや好きなものなどについて、話をしたり聞いたりして、楽しい気持ちでかくことができるようにしたい。

2．事例を通して考えてみる　～4月　スタートカリキュラム　図画工作科～

文部科学省国立教育政策研究所編著　「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム　スタートカリキュラム導入・実践の手引き」

5　授業の実際（本時1，2／2）

（1）本時の目標

自分の好きなものや好きなことから表したいことを見付け、表し方を工夫して絵に表す。

（2）本時の展開【吹き出しはスタートカリキュラムの指導のポイント】

主な学習活動	指導上の留意点
みんなの好きなものは何かな？絵に表してみよう。	
○自分の好きなものや好きなことをかく活動に興味や関心をもつ。 友人の発言をきっかけにして様々な体験や経験を想起し、表したいことを見付けられるようにする。	○「みんなの好きなものは何かな？」と問いかけ、それぞれの子供が好きなものや好きなことを思い浮かべられるようにする。 ○子供の言葉を、動物、食べ物、乗り物、植物などに分けて板書し、それを見ながら発想できるようにする。
画用紙の大きさや、クレヨンやパスの色を選んで、工夫して絵に表そう。	
○自分の好きなものや好きなことの形や色を考えたり選んだりしながら、画用紙の大きさやクレヨンやパスの色を選ぶ。 ○思いのままにかいたり、色を付けたり試したりしながら，クレヨンやパスなどを使って、表し方を工夫してかく。 「かくことが楽しい！」という気持ちを基にいろいろな形や色を選んだり、考えたりしながら、どのように表すかについて考えられるようにする。	○画用紙は小さく切ったものを用意し、何枚もかけるようにし、かきたいものを次々と思い浮かべかくことを大切にする。 ○かいた絵を見ながら、好きなものや好きなことについての話を聞き、さらに表したいことを思い付き、絵に表すことに主体的に取り組めるようにする。
友達の作品を見てみよう。	
○絵に表した自分の好きなものを紹介したり、友人のかいた絵の楽しいところや面白いところを話したりして、自分たちの作品を楽しく見る。 友達の作品から感じたことや考えたことなどを自由に話し合い、その面白さや楽しさ、表し方などについて自分の見方や感じ方を広げられるようにする。	○グループの中で見合ったり、学級全体で見合ったりする。学級全体で見合う場合は、かいた絵を机の上に並べ、作品を見やすくする。

2．事例を通して考えてみる　～体育科（5月）～

文部科学省国立教育政策研究所編著　「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム　スタートカリキュラム導入・実践の手引き」

1　単元名「みんなで　あそぼう」

2　本単元につながる幼児期の子供の姿

幼児は、走ったり、跳んだり、転がったり、ぶら下がったり、投げたり、好きなものになりきって動いたりといった自分の体を動かすことが好きである。園にある遊具や用具に興味をもったり、教職員や友達の動きに誘われたりして、次第に全身を動かし、その楽しさや心地よさを味わうようになる。そして、「できるようになりたい」と自分なりの目標に向けて取り組む中で、教職員や友達の動きをよく見てまねたり、やり方を聞いたり、応援されたりしながら繰り返し挑戦し、やり遂げる達成感を味わうようになる。

また、友達とルールのある遊びを楽しみ、競ったり協力したりして自分たちの力を発揮するようになる。さらに、様々な遊びにおいて、その遊びが楽しくなるように考えを出し合いながらルールをつくったり変えたりもするようになる。

3　単元について

（1）単元の目標

関わり合いながら行う手軽な運動をしたり、固定施設を使って自分の体を動かしたりすることを通して、運動遊びの仕方を知り、楽しく遊ぶことができる遊び方を選ぶとともに、場の安全に気を付け、友達と仲よく取り組むことができる。

（2）単元の指導計画（全４時間：体つくり運動２時間・固定施設を使った運動遊び２時間）

	○主な学習内容　　・学習活動
1～2	○関わり合いながら行う手軽な運動をする。 ・「だるまさんがころんだ」や鬼遊びなど、幼児期に親しんできた遊びや活動（伝承遊びや集団による運動遊び）を楽しむ。 ○いろいろな登り下りやぶら下がり、懸垂移行、渡り歩きや跳び下りなどをする。 ・ジャングルジムや鉄棒、雲梯、登り棒などの校庭の固定施設を使って、いろいろな動きをして遊ぶ。
3～4	○用具などを用いた運動をする。 ・ボール挟みリレー、フラフープ送り、ゴム跳び遊びなど、伸び伸びとした動作で用具などを用いた遊びや活動を楽しむ。 ○いろいろな登り下りやぶら下がり、懸垂移行、渡り歩きや跳び下り、逆さ姿勢などをする。 ・ジャングルジムや鉄棒、雲梯、登り棒などの校庭の固定施設を使って、工夫した動きをして遊ぶ。

4 本単元におけるスタートカリキュラムの指導について

幼児期には、遊びや生活の中で自分のしたいことに向かって、心と体を十分に働かせること、見通しをもつこと、自分たちで進めること、やり遂げることで自信をもつことなどを体験している。また、友達と共通の目的の実現に向けて、考えなどを共有し、工夫したり協力したりなどもする。このような経験や入学直後の施設への関心を生かし、友達と関わり合う活動や遊具を使って遊ぶ活動を取り入れ、協力して目的に向かう喜びを味わうことが大切である。その際、安心して取り組むことができるように、幼児期に親しんできた遊びや活動を取り入れたり、経験してきたルールやきまりを想起したりして、体つくり運動に取り組むとよい。このような運動の経験が、休み時間などの遊びにもつながり、友達と過ごす学校での生活を豊かにしていく。

2．事例を通して考えてみる　～体育科（5月）～

文部科学省国立教育政策研究所編著　「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム　スタートカリキュラム導入・実践の手引き」

5　授業の実際（本時２／４）

（１）本時の目標

関わり合いながら行う手軽な運動や固定施設を使った運動遊びをすることで、いろいろな動きをすることができる。

（２）本時の展開【吹き出しはスタートカリキュラムの指導のポイント】

主な学習活動	指導上の留意点
○遊びながら運動に向かう準備をする。	・体でじゃんけんをしたり、動物や忍者になりきって動いたりするなど、楽しみながら体を動かすことができる遊びを取り入れる。
○「だるまさんがころんだ」や簡単な鬼遊びなど、幼児期に親しんできた遊びや活動（伝承遊びや集団による運動遊び）を楽しむ。 広い校庭に不安を抱く児童もいる。新しく出会った施設を実際に利用することで、安心感が生まれる。	・本時にしたい遊びや活動を出し合うために、前時を振り返る。 ・幼児期に親しんできた遊びや活動を取り入れて、安心して運動できるようにする。 「こんなときはどうしていたの？」などと問い掛ける。困ったことも自分たちで解決していくという自覚を生む。 ・園によって経験してきた遊びや活動が異なるので、ルールを話し合う活動などを適宜行う。 ・誰もが楽しんだり友達との関わりを増やしたりするために、遊びの工夫を教師から提案することも考えられる。 ・教師も児童と遊びや活動を楽しんだり、輪に入ることが難しい児童と一緒に取り組んだりする。
○ジャングルジムや鉄棒、雲梯、登り棒などの校庭の固定施設を使って、いろいろな動きをして遊ぶ。	・固定施設を使って遊ぶ時の楽しい遊び方、ルールやきまり、してみたいことを出し合う。 ・児童が気付いていない安全面での注意事項は、教師が分かりやすく端的に示す。 ・ほかの児童が行っていない動きをしている児童を褒めたり紹介したりして、いろいろな動きを引き出したり広めたりする。 実際の遊びや活動を通して、ルールやきまりを実感的に理解できるようにする。 ・固定施設に苦手意識をもつ児童には、教師が一緒に遊んだり友達同士で遊べるよう声を掛けたりする。

2．事例を通して考えてみる　～要録を作成し、小学校教育へつなげる～

「指導と評価に生かす記録（令和３年１０月）」３章　事例３概要（一部修正）

日々の記録を基に、幼稚園教育要領等に定めるねらいから幼児の成長を捉え、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、小学校の先生にもわかりやすく要録を作成し、小学校教育へとつながるようにした。

５歳児のA児の担任は、日々の記録を基に、以下のように要録の＜指導上参考となる事項＞欄に記入する内容をまとめた。

一学期、年中時より仲の良い友達と一緒に園庭で鬼遊びやドッジボールを好んで行う。次第に体力がつき、運動的な遊びに自信をもつようになった。しかし、自分でやりたいことよりも仲の良い友達の意見に合わせて動くことも多かった。そこで、本児がやりたいことを伝えるきっかけをつくったり、本児の考えを取り上げ、認めたりするようにした。少しずつ、自分の意見を友達に受け止めてもらえる機会が増え、三学期には、自分からやりたいことを伝えたり、友達とやりたい遊びが違うときには、別の友達も誘って遊んだりする姿も見られるようになった。

まとめた内容が小学校の先生にわかりやすく伝えるものとなっているか、以下の視点から検討した。

視点①：「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や育まれている資質・能力を意識して捉えられているか

日々の記録からはA児が気持ちを切り替えて友達と遊ぶ姿を多く読み取れるが、担任がまとめた要録にはそれが表れていないのではないかとの意見がでた。そこで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から記述を見直し、A児の一年で育っている姿を再認識した。

視点②：指導の過程を記しているか

日々の記録に書かれている「自分が考えたことを一人で自信をもって言うことができなかった姿」も加えた方が、幼児の変容がよく伝わるだろうとの協議がなされた。

視点③：小学校での指導に生かすための育ちつつある姿を記しているか

小学校で引き続きどのようなことに配慮して指導すべきかが伝わりにくいとの意見がでた。そこで、自分の気持ちや考えに自信をもった表現をしようとしている姿について丁寧に記すことにした。

2．事例を通して考えてみる　～要録を作成し、小学校教育へつなげる～

「指導と評価に生かす記録（令和３年１０月）」３章　事例３概要（一部修正）

協議を踏まえ、下線部分を追記し、より指導の過程や幼児の育ちが伝わるものとなるようにまとめ直した。

一学期、年中時より仲の良い友達と一緒に園庭で鬼遊びやドッジボールを好んで行う。進級当初は、嫌なことがあると気持ちを切り替えるのに時間がかかることもあったが、繰り返し運動的な遊びをすることで、友達との関わりを楽しみ充実感を味わうようになってきた。また、ルールのある遊びの中で、友達と作戦を考えたり役割分担をしたりしながら楽しんできたことで、自信をもって行動するようになった。（視点①）

自分が考えたことを一人で自信をもって言うことができない姿（視点②）や、自分でやりたいことよりも中の良い友達の意見に合わせて動くことも多かった。そこで、本児がやりたいことを伝えるきっかけをつくったり、本児の考えを取り上げ、認めたりするようにした。少しずつ、自分の意見を友達に受け止めてもらえる機会が増え、三学期には、自分の考えたことを自分なりの言葉で表現したり（視点③）、友達とやりたい遊びが違うときには、別の友達も誘って遊んだりする姿も見られ、表現することへの自信が生まれてきている。（視点③）

この事例を通して、次のことがわかった。

○　小学校で引き続き伸ばしてほしいことや今後の指導に生かしてほしいことを分かりやすく記入することが大切である。
○　「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにして捉えることで、小学校の先生にも伝わりやすいものとなるとともに、先生の視点の偏りを確認でき、総合的に幼児の成長を伝えられることにもつながる。

また、小学校の先生からは以下の感想があった。

○「幼児期の終わりまでに育って育ってほしい姿」が現れるためには、先生方の言葉掛けや環境の構成など指導の積み重ねが大切である。
○幼児ができることやもっている力を理解した上で、１年生の指導を行うことが大切である。

2．事例を通して考えてみる　～園小連携による障害のある幼児への切れ目ない支援～

幼児教育と小学校教育の連携を基盤に、障害のある幼児などが、自己を発揮しながら安心して小学校生活を送ることができるよう、園から小学校へ支援の過程を丁寧に引き継いだ。

○園と小学校の連携を基盤とした支援

・　小学校入学前に、小学校の教室や校庭などを活用して、子供同士の交流を複数回行う。障害のある幼児などが、小学校の施設、教室、机などに触れることで、小学校での生活をイメージし、不安の軽減や期待感の向上につなげるようにする。また、児童や小学校の先生とも触れ合い、入学後に初対面の人ばかりではない状況となるようにした。さらに、当該幼児の遊びや生活の様子、園の先生の関わり方を見て、具体の支援について考える機会とした。
・　園では、お昼や片づけの時間などを活用し、時間に区切のある生活を体験する機会も設けるなど、小学校での生活を意識した園生活を取り入れた。小学校では、スタートカリキュラムとして時間割を柔軟にしたり、当該幼児が好きな遊びを取り入れた活動を展開したり、教室の掲示の仕方に園のやり方を取り入れたりするなど、園と小学校の環境の変化を小さくするなどの工夫を行った。
・　日頃から、園と小学校の先生が教育内容や先生の関わり方などに関する相互理解を深めてきたことで、当該幼児への支援の意図や具体の支援策について、共通のイメージをもちながら話し合うことができた。

○就学先の小学校等への引継ぎにあたって

①園の先生は小学校へ伝える情報を考えるために、小学校での生活や学習を理解する。例えば小学校では、
・児童の状態や教育的ニーズ等に応じ、通級による指導、特別支援クラスがあり、連続性のある多様な学びの場の整備がされている。
・通常のクラスに在籍していても、必要に応じて個別の支援（通級による指導など）を受けることができる。
・発達の程度や適応の状況、学校の環境等を踏まえて、柔軟に学びの場の見直しができる。

②園での幼児の様子や支援等を小学校へ伝える。
・　障害のある幼児などの実態や保護者の要望、園の施設設備や体制等を踏まえ、園での支援方針や支援内容を伝え、幼児への関わり方や今後の課題、必要な支援等について、園の先生と小学校の先生が一緒に考える。
・　得意なことや苦手なこと、園での1日の流れに沿ってどのような支援をしているのか、どのような時に不安を感じたり落ち着きをなくしたりするのか、そのような時にどのような支援をしていたのかなど、なるべく具体的に伝える。
・　障害のある幼児などの小学校での生活をイメージしやすいように、発達にあわせてどのようにスモールステップを設定し支援を行ってきたのかを説明をする。

2．事例を通して考えてみる　～園小連携による障害のある幼児への切れ目ない支援～

言語の遅れや知的の遅れなどが見られるダウン症のあるA児について、小学校の先生が具体的にイメージできるように、園での様子を説明した事例。

【園から小学校に伝えた内容の例】

A児の特性や特徴	・人と関わることが好きで、皆と同じ場で過ごすことができるが、活動への参加は支援を要する。 ・リズムにのって体を動かすことを好み、皆をまねて一緒に走ったり、追いかけ鬼に参加したりする。手先の力は弱く鉄棒などをつかむ、ボールを投げるなどの動きは難しい。 ・自分の思いは表情や態度で表すことが多く、「いや」「だめ」と拒否するときは言葉で言い、手で払いのけたりふくれ顔をしたりして示す。本児なりに気持ちを切り替えようとしても、こだわりが強くなり切り替えられなくなる傾向がある。 等
幼児の成長の様子	○活動への参加について ・興味をもったことを途中で終わりにすることができにくい傾向があったが、クラスの皆が集まることを伝えたり、次のことへの見通しをもてるようにすると、気持ちを切り替えてクラスに戻れるようになってきた。 ・協同製作などは、本児が出来ることで参加し、一緒に活動することを楽しんできている。 ・乗り物ごっこ活動で、乗り物に乗るだけでなく、先生に促されると乗り物を押す役割を行えるようになってきた。 【配慮していること】 ・クラスへの意識が育ってきているので、皆と一緒に活動する中で本児のできることで参加したり、できる役割をもたせたりして満足感がもてるようにした。 ○自己表出・気持ちの切り替え ・「だめ」「いや」の拒否する言葉以外は表情と態度で示していたが、名前を呼ばれると返事をしたり挨拶をしたりするなど、少しずつ発語や語彙が増え、思いを伝えようとするようになってきた。 ・自分の思い通りにならないときは、先生の誘いを拒んだり物から離れようとしなかったが、先生が気持ちを言葉で表し受け止めたり気持ちを満たす対応をすることで、気持ちを切り替えられるようになってきた。 【配慮していること】 ・自分の思いを伝えようとする行為は増えてきているが、まだ言い表せない言葉も多く、先生が気持ちなどを代弁して幼児の語彙が増えるようにした。 ・気持ちの切り替えがしやすいように、「まだ遊んでいたいね。でも○○の時間だから片付けようね。○○をしたらまた遊ぼうね」というように、先生が本児の気持ちを受け止めていることを伝えたりするようにした。

園から小学校に伝えた内容について、保育参観を通して、小学校の先生がA児が他の幼児と遊ぶ様子や興味のあること、好きな遊びの傾向や困難さを感じた時の様子などを観察した。

2．事例を通して考えてみる　～園小連携による障害のある幼児への切れ目ない支援～

【保育参観中のA児の様子】

A児は園庭で三輪車に乗って遊んでいる。片付けてクラスに集まる時間になるが、A児は遊びをやめることができない。先生が「片付けて保育室に戻ります」と声を掛ける（支援①）と、「いや」と言って三輪車を離そうとしない。再度「Aちゃん、片付けて保育室に戻りますよ。集まったら劇をするから」と声を掛けても（支援②）、「いや」と言い口をとがらせて怒る。そこで先生は、「そうか、まだ遊んでいたいのね。あと1周したら終わりにしよう」と言い（支援③）、三輪車置き場で待つことにした。その間「Aちゃん、速い」と声を掛ける。三輪車置き場の手前で誘導して、一緒に片付ける（支援④）。「Aちゃん、片付けるの上手」というと、A児が笑顔で保育室に向う。自分で靴を履き替えて保育室に戻ることができた（支援⑤）。

【保育参観後の話し合い】

A児の姿と先生の支援（①～⑤）について、その意図を小学校の先生に伝えた。

（支援①）今することを、個別に、かつ簡潔に伝えるようにしている。
（支援②）次にすることを知らせて見通しをもてるようにしている。
（支援③）片付けることだけを知らせると、片付けたくない気持ちが募り頑固になる傾向がある。起こって拒否する態度を、もっと遊びたい気持ちの表れと受け止め、１周乗ったら終わりにすることを提案することでA児が納得するようにしている。
（支援④）一緒に片付けることで、A児の気持ちがそれないようにしている。
（支援⑤）自分でできる身の回りのことは、自分で行う姿を見守っている。

この事例を通して、以下のことが分かった。

○障害のある幼児などの実態に応じた支援が小学校に引き継がれ、安心して当該幼児が生活を送るためには、小学校の先生が、小学校での学習や生活の支援をイメージできることが大切。
○園は、保護者の承諾を得た上で、これまでの幼児の様子や保護者の要望、園とのやりとりなどを、なるべく具体的に伝え、園と小学校の先生との意見交換の機会を設けることが重要。
○障害のある幼児などはゆっくりと新しい生活に慣れていく。そうした様子を温かく見守り、継続的な支援をしていくことが大切。

幼児の体験を豊かにする ICT 実践事例集

令和3年度

Information and Communication Technology Practical Casebook

HOP STEP JUMP

HOP 01 きれいな星がいっぱい！

HOP 02 虫のおしりを見てみよう！

HOP 03 ねえ、聞いて！こんな写真をとったよ

HOP 04 マンゴー生産農家さんに育て方を教えてもらったよ

STEP 05 カメはどんなところに住みたいのかな？

STEP 06 体を動かすって楽しいね

STEP 07 ようこそ！バーチャルな世界へ

JUMP 08 オンラインでお買い物

JUMP 09 ほんとにお化けが出てきそう！

本事例集は調査研究員と事例提供をして下さった巻本の各園のご協力により作られました。ここに厚く御礼申し上げます。

令和3年度幼児の体験を豊かにするICT実践事例集作成委員会
学校法人七松学園 認定こども園七松幼稚園

子供の体験を豊かにする ICTの活用

HOP
子供がICT機器で「見る」活動中心
（先生が環境を準備）

STEP
子供がタブレットを使って自分の思いを発揮
（先生が活動を誘動）

JUMP
子供がタブレットを使いながら、思いを共有して協同
（先生は、活動を見守ったり、補ったり）

この事例集では、HOP、STEP、JUMPといった表現で、ICTを活用した活動を紹介しています。幼稚園において ICT を使った実践が、様々な視点で行うことができるように、活動を分けて紹介しています。取り組みやすいと感じられる ICT の活動から以下のように紹介しています。また、HOP、STEP、JUMP には優劣はなく、子供の興味や関心に沿って実践していくことが望まれます。

HOPについては。先生が機器の用意や設置する援助を行い、子供が簡単に ICT を活用して「見る」活動を紹介しています。この活動の後、様々な活動に取り組めるようにと考えています。

STEPについては、子供が主体的にタブレット等を扱い、先生の援助を受けながら活動を展開することや、自分自身の思いを発揮して、他者に表現していく活動を紹介しています。

JUMPについては、先生と子供が、オンライン上のやり取りを含め、ICT 機作を要する活動です。その上で、子供は他者と連携して、日常から非日常の体験をICTで対話を通して深めます。そして、その体験をもとに日常の活動を繋げていくものです。

ICTを取り入れた活動は、タブレットを個人が長時間接触する活動にしないことを注意しつつ、以下の 4 点の留意点があります。

- 子供の興味や関心に沿って行うこと。
- ICTの活動だけで終わるのではなく、「活動の展開」に記載されているような形で体験と体験を結ぶ一助にすること。
- ICTの活動が個人の体験で留まらず、集団とのやり取りの中で、情報収集、対話、探究心を生み出すきっかけにすること。
- ICTを活用の際に先生は手助けしすぎず、子供が自分の思いを実現しようと、試行錯誤したり、想像を膨らませたりできるようにすることです。

幼児期は、自己の世界が広がり、興味や関心も広がっていく時期です。普段は目に触れないような昆虫の体の細部、空一面の星空や流れ星がありますが、ICT機器の活用により、子供はそうしたことに触れ、興味や関心をもち、わくわくしながら遊びや生活の中に取り入れていきます。そうした遊びは、ICT 機器を使ったものとは限りません。園庭での虫探し、子供が忍者や盗になったつもりでのごっこ遊びがあります。

ふとしたきっかけ、ちょっとした環境との出会いが、子供の興味や関心を広げたり、遊びを発展させたりします。ICT機器にもそうした可能性があります。

ICT機器の操作ができることが目的ではなく、子供の環境的な体験を基盤とした ICT 機器の活用により、子供の体験が豊かになります。そのためには、ICT 機器を活用する場面においても、子供の思いから生み出される活動を先生が援助する姿勢が大切です。

この事例集の活動が、折り紙やハサミを使うように、子供が日常の遊びの中で ICTを活用することの一助になることを祈っています。

2．事例を通して考えてみる　～ICT機器を活用した幼児の豊かな体験～

令和3年度文部科学省委託事業「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」

HOP 01 きれいな星がいっぱい！
～おへやで星空を見てみよう！～

実際に見てみたいという声が上がり、プロジェクターで遊戯室の天井にプラネタリウムを投影した。

▲7月七夕製作時に星座の絵本を読んだことから、星座に興味を持った。

活動内容

星座の絵本を読み七夕製作を行った。そこから星座に興味を持ち、天井にプラネタリウムを投影し、楽しんで観察する。

使用するICT機器・ソフト

タブレット　プロジェクター　星座アプリ

・子供の育ち・

- 思考力の芽生え
- 社会生活との関わり
- 言葉による伝え合い
- 自然との関わり・生命の尊重

・活動の発展・

- 星空だけではなく、雲や虹など様々な空の様子を投影してみる。
- 天気のいい日は実際に外へ出て、本物の星を見て自然体験をしてみる。

HOP 02 虫のおしりを見てみよう！
デジタル顕微鏡でミクロの世界を体験しよう！

◀興味のある部分をデジタル顕微鏡で拡大して見る。

対象物が動いて見えにくいため、静画機能を使い静止画で観察する様子。

活動内容

気になった対象物をデジタル顕微鏡で観察する。

使用するICT機器・ソフト

タブレット　デジタル顕微鏡

・子供の育ち・

- 思考力の芽生え
- 自然との関わり・生命尊重
- 言葉による伝え合い
- 協同性
- 道徳性・規範意識の芽生え

・活動の発展・

- 自分達が顕微鏡を使って気付いたことや、知ったことなどをまとめ、オリジナルの図鑑を作る。
- 生き物の特性を知り、住みやすい環境を調べ話し合い、ダンゴムシの家作りをする。

HOP 03 ねえ聞いて こんな写真をとったよ
写真コンテストをしよう！

▲写真を撮影する様子。

写真について意見発表する子供の様子。▶

活動内容

グループに分かれてどんな写真を撮るか話し合い、タブレットで撮影した。撮影したものの中から1枚選んでモニターに写し、どうしてこの写真を選んだのか自分の意見を発表する。

使用するICT機器・ソフト

タブレット　モニター

・子供の育ち・

- 豊かな感性と表現
- 社会生活との関わり
- 言葉による伝え合い

・活動の発展・

- アプリを用いて撮影した人や物を動画に登場させて、お話作りをしてみる。
- 気になった対象物をより細かく見られるようにデジタル顕微鏡を使用してみる。

HOP 04 マンゴー生産農家さんに育て方を教えてもらったよ

▲ビデオ会議システムを使って生産農家の方と交流している様子。

▲話題に出ったことを確認している様子。

活動内容

マンゴーを生産している方からマンゴーとマンゴーの苗をいただいたことをきっかけに、沖縄のことについて調べた。分からない事や疑問に思ったことは、ビデオ会議システムを通して直接農家さんに聞いてみる。

・子供の育ち・

- 社会生活との関わり
- 言葉による伝え合い
- 思考力の芽生え

使用するICT機器・ソフト

パソコン　液晶テレビ　ビデオ会議システム

・活動の発展・

- マンゴーが実れば、その調理方法についてオンライン上で質問しながらクッキングを行う。
- マンゴーだけではなく、その土地にちなんだ野菜なども育ててみる。
- その地域の食べ物・料理・伝統文化について知り、興味を深める。

STEP 05 カメはどんなところに住みたいのかな？

▲カメが冬眠できそうな場所を、グループに分かれて探し、写真を撮る。

保育室で撮影した写真を液晶テレビに映し、グループごとに冬眠できそうな場所を発表し合う。

活動内容

保護者から頂いたカメに愛着を持ち、名前を決め、餌やりや散歩をするなど、世話をする姿が見られた。グループごとにカメが冬眠できそうな場所を探し、撮影・発表する。

・子供の育ち・

- 思考力の芽生え
- 協同性
- 言葉による伝え合い
- 自然との関わり・生命尊重

使用するICT機器・ソフト

タブレット　液晶テレビ

・活動の発展・

- 水族館の人とビデオ会議システムを使って交流する中で、カメの飼育の仕方について教えてもらう。
- カメの１日をタイムラプス（低速度撮影）でどのような場所を好むか調べる。

STEP 06 体を動かすって楽しいね ～プロジェクターとタブレットで身体表現に挑戦～

▲↑↓↑↓の音楽を流しながら、自分の感じたことを思いのままに動く。

▲踊りを楽しの画像、向きを広げて踊れる。

▲自分の描いた絵をプロジェクターで投影し身体活動を行う。

活動内容

- お遊戯室の中央に布を吊るしスクリーンにし、タブレットの映像をプロジェクターに投影する。
- 映しだされた映像から感じたことを自由に表現する。
- タブレットで描いた自分の絵を投影し身体表現をする。

・子供の育ち・

- 思考力の芽生え
- 自立心
- 協同性
- 豊かな感性と表現

使用するICT機器・ソフト

タブレット　プロジェクター　スクリーン

・活動の発展・

- 水滴だけではなく、雲や空の上など様々な画像を投影し、子供達の表現力を伸ばす。
- 映像を友達と見て表現遊びをする中で、友達との表現の違いに気付く。

STEP 07 ようこそ！バーチャルな世界へ

▲シルエットから資料を推理する絵本にヒントを得て、影絵で遊ぶ。

▲素材をブルーの透明フィルムに、自分で作った魚のペープサートを動して遊ぶ様子。

▲魚釣りコーナーに映し出された魚をつかもうとする。

活動内容

- シルエットから資料を推理する絵本にヒントを得て、影絵で遊ぶ。
- ブルーフィルムを使用することで海底のように見えたことで、魚のペープサートを作り、動かして遊ぶ。
- 撮影した動画を壁に映し、イメージを共有しながら映し出された魚をつかもうとするなど、バーチャル遊びを楽しむ。

・子供の育ち・

- 社会生活との関わり
- 協同性　● 言葉による伝え合い
- 数量や図形・標識や文字などへの関心・感覚
- 思考力の芽生え
- 豊かな感性と表現

使用するICT機器・ソフト

プロジェクター　タブレット

・活動の発展・

- 地域の老人ホームなどの施設に出向き、お年寄りの方に自分達の成果を見せるなどの交流を行う。（地域交流）
- 青色のカラーフィルム以外の色を使ってみる事で、色の持つイメージから様々な世界観を表現する事を楽しむ。

2．事例を通して考えてみる　～ICT機器を活用した幼児の豊かな体験～

令和3年度文部科学省委託事業「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」

JUMP 08 オンラインでお買い物 ～カレー作りをICTで広げる活動～

▲シンバルをつけたスマホで撮影しながら、買い物の様子をビデオ会議システムで中継している様子。

▲ビデオ会議システムで調理の様子を中継し、疑問点などを調理師に質問する。

▲クッキングをする際は、手元の画像を映しながら行う。

活動内容

- カレー作りに必要な材料をクラスの代表５名の子供がスーパーに買い物に行く。（コロナ感染拡大防止の観点からクラス全員では買い物へ行けない為、手振れ防止のカメラを用いて撮影し、買い物の様子をビデオ会議システムで中継した）
- 後日のカレー作りの様子をビデオ会議システムでつなぎ、調理の様子を見学する。
- カレー作りの手順を知り、実際にカレー作りを行う。

・子供の育ち・

- 豊かな感性と表現
- 社会生活との関わり
- 思考力の芽生え

使用するICT機器・ソフト

パソコン　液晶テレビ　ビデオ会議システム

・活動の発展・

- 子供達が興味を持った活動に伴う、様々な施設とビデオ会議システムを用いて交流してみる。
- 保育時間の関係上、遠足で行けそうにない場所でも実際に行ったような気分を味わい、様々な発見が出来る。（博物館・動物園・水族館等）
- 遠隔地にいる人との交流により様々な国の文化を知る。（海外へ留学した友達との交流等）

JUMP 09 ほんとにお化けが出てきそう！ タブレットでお化け屋敷のBGM作り

▲タブレットの音楽制作アプリでBGM作り。

▲友達とお化け屋敷作りをしている様子

▲お化け屋敷に合う音を探す。

活動内容

- 友達とお化け屋敷作りが始まり、クラスに広がる。
- タブレットの音楽制作アプリを使って自分達で効果音を作り、お化け屋敷作りをして遊ぶ。

・子供の育ち・

- 自立心　● 協同性
- 言葉による伝え合い
- 道具や機材・標識や文字などへの関心・感覚
- 豊かな感性と表現
- 思考力の芽生え

使用するICT機器・ソフト

タブレット　音楽制作アプリ

・活動の発展・

- 地域の中学校、高校などの吹奏楽部の方とオンラインを繋ぎ、本物の楽器やその音色などを聞かせてもらう。
- 音への関心が深まったら、自分達でリズムなどを考えてみる。

創造力や協同性から プログラミング的思考の基盤まで、 遊びには無限の可能性

これまでの事例を見ていただいたように、子供たちはICTを活用してさまざまな活動を深められることが感じていただけたのではないでしょうか。これからの子供たちはハサミと同じようにICT機器を活用して自然に暮らしていくようになるでしょう。そればかりか、使ったり楽しんだりする以上に「創る」「創造する」側になっていくでしょう。小学校からプログラミング教育が始まりますが、幼児期の段階では子供にふさわしい遊びや生活を踏まえて「プログラミング的思考」の基礎を培っていくべきでしょう。

「プログラミング的思考」では、子供たちが一連の活動を実現するために、どのような動きの組み合わせが必要かを考え、手順をどのように改善すればより効果的に自分の意図したものに近づくかを考えます。それは「論理的に考える力」を育てることであり、普段の生活の中で思考力の芽生えとして培われていくものです。決して高価な機器を導入してコードを書く準備をすることだけが唯一の方法ではありません。

例えば、クッキングをする時に、どのような手順で料理するかを調べ、簡単書きやイラストにしたりして子供たちの間で共有します。そこで役割分担をすることで、より効率的に進められることが考えられます。お店屋さんごっこで、レストランをどう経営するかも面白いかもしれません。その際、先生が意図して子どもたちの話し合いをホワイトボードに書きとめたり、図にまとめるなどして、わかりやすく考えをまとめられるようにするといいでしょう。また、集団遊びのルールや運動会の競技の方法を自分たちで考えたり、すごろくやボードゲームを作ったりする中でも、プログラミングに必要な条件分岐や繰り返しなどといった基本的な考え方を身に付けることができます。

時には、うまくいかない経験も重要です。問題点や課題を見つけ出すと同時に、解決策を模索する過程で、子供たちの思考が深まっていきます。ゲームがすぐに終わってしまったり、お店で暇な人がいるかと思えば、お客さんがいっぱいになってしまうかもしれません。そこで先生がすぐに答えを出してしまうのではなく、子供たちと一緒になって考えること、そして問題を乗り越える経験をすることの方が大切です。右手に紙ッぱや泥だんご、左手にタブレットを持ちながら、豊かな幼児期を過ごして欲しいと願っています。

令和3年度幼児の体験を豊かにするICT実践事例集

本事例集は、文部科学省の令和３年度「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」の委託事業として、学校法人七松学園が研究成果の一部をまとめたものであり、権利、著作等には文部科学省の承諾が必要です。

令和３年度幼児の体験を豊かにする ICT 実践事例集作成委員会

代表　西　亀山　秀郎　（学校法人七松学園）

開発研究委員　牧竹　智恵子　（認定こども園七松幼稚園）
　　永井　智恵子　（認定こども園七松幼稚園）
　　神谷　正勝　（武庫川女子大学）
　　高橋　郁　（東京大学発達保育実践総合センター）
　　福田　城太　（聖和学園短大学）
　　田田　裕之　（関西国際大学）

事例集作成協力者　宇佐　直也　（常見第一幼稚園（03, 09））
（掲号は該当事例に対応）　藤見　盛子　（認定こども園七松幼稚園（03, 04））
　　北村　由紀子　（白鳥幼稚園（02, 07））
　　川上　朱沙　（認定こども園七松幼稚園（01, 05, 08））
　　仲島　智美　（認定こども園七松幼稚園（01, 05, 08））
　　菅原　智美　（認定こども園七松幼稚園（01, 05, 08））

（ｏ十音順・敬称略）

事例集作成：株式会社 SKS

3．「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と先生の関わり、環境の構成や小学校へのつながり

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼児一人一人の発達していく姿を捉え、生活や学びの質を高めていくよう、先生方の関わりや環境の構成を改善・充実していくための視点として活用。

また、幼児期に育まれた力が小学校教育にどのようにつながっていくのか、関係者がイメージを共有できる手掛かりとしても活用（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、各教科等のみでなく、小学校以降の学習や生活の基盤につながる姿であることにも留意）。

※下記の一覧表は、幼稚園教育要領等の解説を参考に整理したもの。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿		幼児教育施設			小学校へのつながり
		～5歳児前半の姿	5歳児後半の姿	先生の関わり、環境の構成	
健康な心と体	園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。	安定感をもって環境に関わり、自己を十分に発揮して遊びや生活を楽しむ中で、体を動かす気持ちよさを感じたり、生活に必要な習慣や態度を身に付けたりしていく。	充実感をもって自分のやりたいことに向かって、繰り返し挑戦したり諸感覚を働かせたりして、体を思い切り使って活動したりするなど、心と体を十分に働かせる。そして、遊びの目的に沿って、時間を上手く使い、適切な場所を選んで、遊びを進めたり、衣服の着脱食事、排泄などをいつどのように行うのかがわかったりするようになるなど、見通しをもって行動し自ら健康で安全な生活を創り出すようになる。	・幼児が自ら体を動かし多様な動きを楽しめるような場や遊具を用意する。 ・園生活が幼児の意識の中でつながり、大まかな予測が立てられるように工夫する（例えば、十分に遊んだ満足感が次の活動への期待感につながり、片付けの必要性を無理なく受け止められる）。 ・健康で安全な生活のために必要なことを、学級で話題にして一緒に考えてやってみたり自分たちでできたことを十分に認めたりするなど、自分たちで生活をつくりだしている実感をもてるようにする。 ・交通安全を含む安全に関する指導について日常的な指導を積み重ねることによって、自ら行動できるようにしていく。	・時間割を含めた生活の流れがわかるようになると、次の活動を考えて準備する。 ・安全に気を付けて登下校。 ・小学校での運動遊びや、休み時間に他の小学生と楽しく過ごす。
自立心	身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。	身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、信頼する先生に支えられながら、物事を最後まで行う体験を重ね、自分の力でやろうとする気持ちをもったり、やり遂げた満足感を味わったりするようになる。	飼育動物の当番活動から自分の役割の大切さを感じるなど、園生活を通して、自分のしなければならないことを自覚し、自ら行動するようになる。また、遊びや生活の中で様々なことに挑戦し、失敗も繰り返す中で、難しいことでも自分の力でやってみようとして、考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げる体験を通して達成感を味わう。そこで得た自信を基に、もっと難しい課題を自ら設定し、挑戦していく。そのような姿を先生や友達から認められることで、意欲が高まり、自信を確かなものにしていく。	・主体的に園生活が送れるように、その日に必要なことを分かりやすいように視覚的に提示する。 ・幼児が自ら考えて行動できるように、ゆとりをもった園生活に配慮する。 ・やり遂げたことを共に喜ぶ。 ・幼児が失敗を繰り返したりしている時には幼児なりに取組んでいる姿を認めたり、時には一緒に行動しながら励ましたりする。 ・幼児のよさが他の幼児に伝わるようにしたり、学級全体の中で認め合える機会を作ったりする。	・自分でできることは自分でしようと積極的に取り組む。 ・生活や学習での課題を自分のこととして受け止めて意欲的に取り組む。 ・自分なりに考えて意見を言ったり、分からないことや難しいことは、先生や友達に聞きながら粘り強く取り組む。

3．「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と先生の関わり、環境の構成や小学校へのつながり

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿		幼児教育施設			小学校へのつながり
		～5歳児前半の姿	5歳児後半の姿	先生の関わり、環境の構成	
協同性	友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。	友達と関わる中で、様々な出来事を通して、嬉しい、悔しい、悲しい、楽しいなどの多様な感情体験を味わい、友達との関わりを深めていく。その中で互いの思いや考えなどを共有し、次第に共通の目的をもつようになる。	イメージや目的を共有し、それを実現しようと、協力したり折り合いを付けたりすることを繰り返す中で、仲の良い友達だけではなくいろいろな友達と一緒に、さらには、学級全体で協同して遊ぶことができるようになっていく。そして、考えたことを相手に分かるように伝え合いながら話し合い、一人では得られないものに集中していく気分を感じたり、力を合わせて問題を解決したりして、自分も他の幼児も生き生きするような関係性を築いていく。そうして、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。	・幼児一人一人の人との関わりの経験の違いを把握し、幼児によっては、自分に自信がもてなかったり、他者に対して不安になったり人への関心が薄かったりすることもあることを踏まえて、適切な援助を行う。 ・集団の中のコミュニケーションを通じて、共通の目的が生まれてくる過程や、幼児が試行錯誤しながらも一緒に実現に向かおうとする過程、いざこざなどの葛藤体験を乗り越えていく過程を大切に受け止め、一人一人の幼児が十分に自己発揮しながら、他の幼児と多様な関りがもてるように援助する。 ・他の幼児を意識していてもうまくいかない場面では、先生の姿勢や言葉かけから他の幼児のよさや協同して活動する大切さに、幼児自身が気付くようにする。	・学級での集団生活の中で、目的に向かって自分の力を発揮しながら友達と協力し、様々な意見を交わす中で新しい考えを生み出しながら工夫して取り組んだりするなど、先生や友達と協力して生活したり学び合ったりする。

3．「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と先生の関わり、環境の構成や小学校へのつながり

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿		幼児教育施設			小学校へのつながり
		～5歳児前半の姿	5歳児後半の姿	先生の関わり、環境の構成	
道徳性・規範意識の芽生え	友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。	他の幼児と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことがあることを分かり、考えながら行動するようになっていく。	いざこざなどの場面において、どうしたら楽しく遊べるか解決策を話し合ったり提案したりするような体験を重ねていく。そうした中で、自分の行動が正しいと思っていても、話し合いの中で友達の納得できない思いを受け止めたり、友達に気持ちを受け止めてもらったことで、自分の行動を振り返って相手に謝ったり、気持ちを切り替えたりして、相手の立場に立って行動するようになる。 また、人間関係が深まる中で、きまりを守る必要性が分かるようになっていく。特に、友達と遊ぶということは、自他に共有された何らかのルールに従うことであり、ルールを守ることで遊びが楽しめることを知り、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けていくようになる。さらに、より面白くなるようにルールをつくり替えたり、年下の幼児が加われば、仲間として一緒に楽しめるように特例を作ったりするようになる。	・過去の幼児の経験を念頭に置き、相手の気持ちを分かろうとしたり、遊びや生活をよりよくしていこうとしたりする姿を丁寧に捉え認め、励まし、その状況などを他の幼児にも伝えていく。 ・幼児が自分の言動を振り返り納得して折り合いを付けられるように、問い掛けたり共に考えたりし、幼児が自分たちで思いを伝え合おうとする姿を十分に認め、支えていく。 ・いざこざや言葉のやり取りが激しかったり長い間続いたりしている場合には仲立ちをする。 ・幼児がなかなか気持ちを立て直すことができそうにない場合には、先生が幼児の心のよりどころとなり、適切な援助をする。 ・日々の遊びや生活の中できまりを守らなかったために起こった問題に気付かせ、きまりの必要性を幼児なりに理解できるようにする。 ・善悪を直接的に示したり、また、集団生活のきまりに従うように促したりするとともに他者とのやり取りの中で幼児が自他の行動の意味を理解し、何がよくて何が悪かったのか考えることを促す。	・初めて出会う人の中で、幼児期の経験を土台にして、相手の気持ちを考えたり、自分の振る舞いを振り返ったりなどしながら、気持ちや行動を自律的に調整し、学校生活を楽しくしていこうとする。

3．「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と先生の関わり、環境の構成や小学校へのつながり

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿		幼児教育施設			小学校へのつながり
		～5歳児前半の姿	5歳児後半の姿	先生の関わり、環境の構成	
社会生活との関わり	家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。	初めての集団生活の場である園生活を通して、先生との信頼関係を基盤としながら園内の幼児や教職員、他の幼児の保護者などいろいろな人と親しみをもって関わるようになる。その中で、家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、小学生や中学生、高齢者や働く人々など地域の身近な人と触れ合う体験を重ねていく。	幼児は、保護者、先生、友達、小学生や地域の人々とのこれまでの関わりを通して、家族の愛情に気付き、家族を大切にしようとするとともに、相手に応じた言葉や振る舞いなど、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わるようになっていく。さらに、手伝い等を通して、相手から感謝され、自分が有用な人間であることを自覚し、役に立つ喜びを感じるようになっていく。 また、好奇心や探究心が一層高まり、関心のあることについて、より詳しく知りたいと思ったり、より本物らしくしたいと考えて遊びの中で工夫したりする中で、身近にあるものから必要な情報を取り入れるようになる。そうした体験を通して、幼児は、自分だけでは気付かなかったことを知ることで遊びがより楽しくなることや、情報を伝え合うことのよさを実感していく。また、地域の公共の施設などを訪れることで、その場所や状況に応じた行動をとりながら大切に利用することなどを通して、社会とのつながりなどを意識するようにもなっていく。	・機会を捉えて親や祖父母などの家族のことを話題にしたり、その気持ちを考えたりする機会を設け、幼児が、家族の愛情に気付くようにする。 ・地域の人々や障害のある幼児などとの交流の機会を積極的に取り入れ、地域の人たちとの関わる中、人間は一人だけで孤立して生きているのではなく、周囲の人たちと関わり合い、支え合って生きていることを、幼児が実感できるようにする。 ・絵本や図鑑や写真、新聞やインターネットで検索した情報、地域の掲示板から得られた情報などを、遊びに取り入れやすいように見やすく保育室に設定するなどの工夫をし、幼児の情報との出会いをつくっていく。 ・家族から聞いたり自分で見付けたりするなど幼児なりに調べたことを加えたり、遊びの経過やそこで発見したことなどを、幼児が関わりながら掲示する機会をもつ。 ・先生がモデルとなり、情報を集める方法や集めた情報の活用の仕方、そのことを周囲に伝える方法などがあることに気付かせる。 ・遊具や用具について、自分も友達も使いたいことで起こる衝突やいざこざなどの体験を通して、個人の物と皆の物とがあることに気付かせていく。 ・図書館や高齢者福祉施設などの様々な公共の施設の利用を通して、このような施設が皆のものであり、大切に利用しなければならないことを指導する。	・相手の状況や気持ちを考えながらいろいろな人と関わることを楽しむ。 ・関心のあることについての情報に気付いて積極的に取り入れたりする。 ・地域への親しみや地域の中での学びの場を広げていく。

3．「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と先生の関わり、環境の構成や小学校へのつながり

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿		幼児教育施設			小学校へのつながり
		～5歳児前半の姿	5歳児後半の姿	先生の関わり、環境の構成	
思考力の芽生え	身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。	身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりするようになる。	幼児は、物に興味をもって繰り返し関わる中で、次第にその性質や仕組みに気付き、幼児なりに物の仕組みなどを生かして、考えたり予想したり、工夫したりすることで遊びが発展していく。すると、物との関わりが深まり、新たに物の性質や仕組みに気付くといったように、遊びを通して物の理解を深めていく。 また、遊びの深まりや仲間の存在は、幼児が物と多様な関わりをすることを促すが、幼児一人一人によって、興味や関心、発想の仕方考え方などが異なっている。幼児は、自分とは違った考え方をする友達が試行錯誤している姿を見たり、その考えを聞いたり、友達と一緒に試したり工夫したりする中で、友達の考えに刺激を受け、自分だけでは発想しなかったことに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わい、自分の考えをよりよいものにしようという気持ちが育っていく。	・環境の中にあるそれぞれの物の特性を生かしつつ、その環境から幼児の好奇心や探究心を引き出すことができるような状況をつくる ・それぞれの幼児の考えを受け止め、そのことを言葉にして幼児たちに伝えながら、更なる考えを引き出していく。 ・幼児が他の幼児との意見や考えの違いに気付き、物事をいろいろな面から考えられるようにすることやそのよさを感じられるようにする。	・新しい環境や教科等の学習に興味や関心をもって主体的に関わる。 ・探究心をもって考えたり試したりする経験は、主体的に問題を解決しようとする。

3．「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と先生の関わり、環境の構成や小学校へのつながり

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿		幼児教育施設			小学校へのつながり
		～5歳児前半の姿	5歳児後半の姿	先生の関わり、環境の構成	
自然との関わり・生命尊重	自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にする気持ちをもって関わるようになる。	園内外の身近な自然の美しさや不思議さに触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、関心をもつようになる。 また、身近な動植物に愛着をもって関わる中で、生まれてくる命を目の当たりにして感動したり、ときには死に接したりし、生命の不思議さや尊さに気付き、大切にする気持ちをもって関わるようにもなる。	主体的に自然のいろいろな面に触れることで、好奇心や探究心が生まれ、考えたことを幼児なりの言葉などで素直に表現し、先生や友達の共感により一層関わりたくなっていく。そして、遊びに取り入れたりする中で、新たな気付きが生まれ、更に関心が高まり、自然への愛情や畏敬の念をもつようになっていく。 小動物と遊んだり、餌を与えたり草花を育てたりする体験、生命の誕生や終わりに遭遇する体験などを通して、命あるものに対して、親しみや畏敬の念を感じ、自分と違う生命をもった存在として意味をもつようになる。そして、ただかわいがるだけではなく、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にする気持ちをもって関わるようになる	・園内外の自然の状況を把握して積極的に取り入れる。 ・幼児の体験していることや気付いたことを先生が言葉にして伝えることによって、幼児がそのことを自覚できるようにしたりしながら、それぞれが考えたことを言葉などで表現し、更に自然との関わりが深まるようにする ・飼育や栽培を通して単に世話をすることを教えるだけでなく、ときには関わり方の失敗や間違いを乗り越えながら、命あるものをいたわり大切にする気持ちをより育むように援助する。 ・それぞれの生き物に適した関わり方ができるよう、幼児と一緒に調べたり、幼児たちの考えを実際にやってみたり、そこで分かったことや適切な関わり方を、学級の友達に伝えたりする機会をつくる。	・自然の事物や現象について関心をもち、その理解を確かなものにしていく基盤となる。 ・実感を伴って生命の大切さを知ることは、生命あるものを大切にし、生きることのすばらしさについて考えを深める。
数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。	身近にある数字や文字に興味や関心をもったり、物を数えることを楽しんだりする場面が見られるなど、先生や友達と一緒に数量や図形、標識や文字などに触れ、親しむ体験を重ねていく。	自分たちの遊びや生活の中で必要感をもって、多い少ないを比べるために物を数えたり、長さや広さなどの量を比べたり、様々な形を組み合わせて遊んだりすることなどを通して、数量や図形への興味や関心を深め、感覚が磨かれていく。 生活の中で様々な標識（交通標識など）に触れたり、絵本や手紙ごっこを楽しむ中で自然に文字に触れたりすることを通して、標識は人が人に向けたメッセージであることや、文字が様々なことを豊かに表現するためのコミュニケーションの道具であることに気付き遊びの中で使ってみたりすることで、興味や関心を深め、感覚が磨かれていく。	・園生活で触れる形（積み木、花や昆虫など）に注目するように促したり、数えたり図ったりすること便利さに気付くようにする ・自分が話している言葉がある特定の文字や標記に対応していることを知るなど、幼児が新鮮な驚きと喜びを感じるような文字や標識との出会いができるよう、掲示物などの環境を工夫する。 ・園内にマークと文字を組み合わせた表示、形の特徴を生かして物を片付ける場所の工夫などをする。 ・幼児が関心をもったことに存分に取り組む中で数量や文字等との出会いを捉え、一人一人の関心のもちようを把握して、その活動の広がりや深まりに応じて数量や文字などに親しめるように環境を工夫する。	・小学校の学習に関心をもって取り組み、実感を伴って理解する。 ・学んだことを日常生活の中で活用しようとする。

3．「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と先生の関わり、環境の構成や小学校へのつながり

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿		幼児教育施設			小学校へのつながり
		～5歳児前半の姿	5歳児後半の姿	先生の関わり、環境の構成	
言葉による伝え合い	先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。	絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付けていく。また、自分の気持ちや思いを伝え、先生や友達が話を聞いてくれる中で、言葉のやり取りの楽しさを感じ、そのやり取りを通して相手の話を聞いて理解したり、共感したりするようになっていく。	絵本や物語などの読み聞かせを通して、読んでもらった絵本や物語に特別な親しみを感じるとともに絵本や物語の世界を想像したり、自分の体験と照らし合わせたりして、豊かな言葉や表現を身に付けていく。そして、経験したことや考えたことなどを先生や友達に言葉などで伝え共感できる喜びを感じたり、自分の言ったことが相手に通じず、言葉で伝えることの難しさやもどかしさを体験したりするようになっていく。さらに、相手の話を注意して聞くようにもなっていく。例えば、相手の話に興味をもって聞いたり、ときには友達とのいざこざなどを通じて、そのときの相手の気持ちや行動を理解したいと思い、必要感をもって聞くこともある。このような体験を繰り返す中で、自分の話や思いが相手に伝わり、また、相手の話や思いが分かる喜びを感じ、言葉による伝え合いを楽しむようになる。	・読み聞かせでは、落ち着いた雰囲気をつくり、幼児が絵本や物語の世界に浸り込めるようにする。 ・幼児の動線を踏まえて、幼児の目に触れやすい場に絵本が置かれ、落ち着いてじっくり見ることができる環境をつくる。 ・語り継がれている作品は、美しい言葉や韻を踏んだ言い回し、繰り返しの言葉で声を出して楽しめるものもあるので、お話の世界を通していろいろな言葉と出会えるようにする。 ・リズミカルな節回しの手遊びや童謡を歌うこと、しりとり、短い話をつなげて皆で一つの物語をつくるなど、言葉遊びを取り入れ、いろいろな言葉に親しめるようにする。 ・先生は、正しく分かりやすく、美しい言葉を使って幼児に語り掛け、言葉を交わす喜びや豊かな表現などを伝えるモデルとしての役割を果たす。 ・先生が、幼児の話やその背後にある思いを聞きとり、友達同士で自由に話せる環境を構成したり、幼児同士の心の交流が図られるように工夫したりする。 ・幼児の状況に応じて、言葉を付け加えるなどして、幼児同士の話が伝わり合うように援助をする。	・友達と互いの思いや考えを伝え、受け止めたり、認め合ったりしながら一緒に活動する。 ・自分の伝えたい目的や相手の状況などに応じて言葉を選んで伝えようとする。

3．「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と先生の関わり、環境の構成や小学校へのつながり

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿		幼児教育施設			小学校へのつながり
		～5歳児前半の姿	5歳児後半の姿	先生の関わり、環境の構成	
豊かな感性と表現	心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。	生活の中で心を動かす出来事に触れ、みずみずしい感性を基に、思いを巡らせ、様々な表現を楽しむようになる。幼児の素朴な表現は、自分の気持ちがそのまま声や表情、身体の動きになって表れることがある。また、先生や他の幼児に受け止められることを通して、動きや音などで表現したり、演じて遊んだりしながら、自分なりに表現することの喜びを味わう。	幼児が身近な環境と関わる中で、何かを感じ、考えさせられ、その感動を友達や先生と共有し、感じたことを様々に表現することによって一層磨かれていく。このように、心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々なものを遊びの中に取り込み、何かに見立てたり、素材の組み合わせを楽しんだりして、自分なりの素材の使い方を見付けていく。そうして、一つの素材についていろいろな使い方をしたり、あるいは、一つの表現にこだわりながらいろいろな物を工夫して作ったりする中で、その特性を知り、表現の幅を広げていく。そして、感じたことや考えたことを自分で表現したり友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。	・幼児らしい表現を受け止め共感し、表現する意欲を高める。 ・先生のもつイメージを押し付けるのではなく、幼児と感動を共有できる感性を先生自身がもつ。 ・多様な素材や用具に触れながらイメージやアイデアが生まれるように、材質、携帯、使いやすさなどを考慮して環境を整えていく。	・感性を働かせ、表現することを楽しむ。このことは、音楽や造形、身体等による表現の基礎となるだけでなく、自分の気持ちや考えを一番適切に表現する方法を選ぶなど、学校以降の学習全般の素地になる。

4．幼児教育アドバイザーの配置等の主な成果

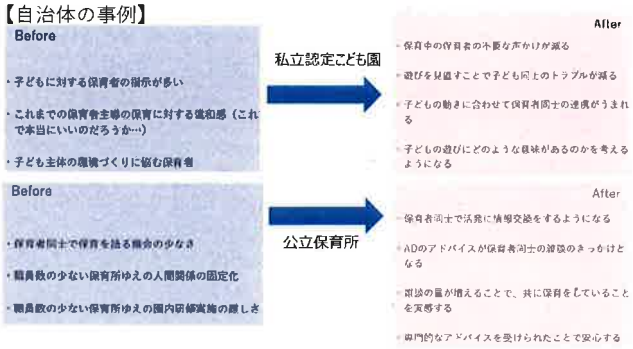
○幼保小連携の取組の充実・深化

教委主催の園小連携協議会で、小学校区単位（小１担任と幼保の園年長担任）でグループを作り、カリキュラム等の打合せ・協議の例（写真左）など管理職のみならず**担任レベルでも具体的な連携が促進**。幼小両免許を持つ教員が幼稚園側、小学校側双方に配置されている例もある。

○園種問わない幼児教育の質向上

幼稚園のみならず、**公私立の認定こども園や保育所も含めた園種問わない幼児教育の質向上の取組促進**

【自治体の事例】



○小学校教育との接続を見据えた幼児期の教育の研究推進

小学校教育との接続も見据え、教委が主導した**園種問わない幼児教育施設を活用した幼児期の教育の研究推進**、域内幼児教育施設への普及。

○０歳からの学びの研究（園環境を活用した新たな生活や遊びの創造（市教委）

【０歳児】

【２歳児】

【４歳児】

○幼小中一貫教育の取組の推進（市教委）

幼保小接続（学園共有）
保幼こども園、小中教員、保護者との連携

※中学校区内の公私立幼保こども園、小中学校を学園という。

思考・表現の基礎（文字・数・思考）
思考力の芽生え、数量や図形、標識や文字などへの関心

学びに向かう力
好奇心、協同性、考えを伝える力、がんばる力など

生活習慣
自立心、道徳性・規範意識の芽生え、健康な体、社会生活との関わりなど

学園推進委員会を定期的に実施

○上記のほか、特別支援教育や要保護児童等に関する幼児教育施設と小学校との円滑な連携の取組例が見られる。